



# 志月雅日記

(147)

## 不失花

えと文 二井栄逸

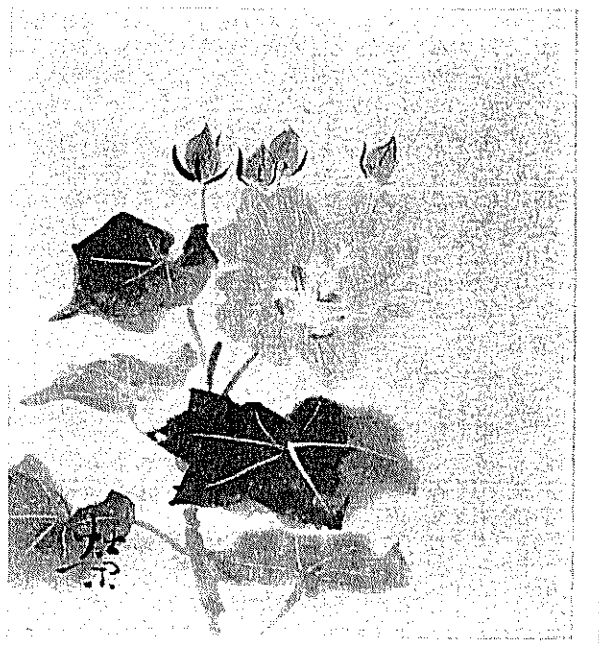
世阿弥が、自著の風姿花伝の中に残した数々のことばの一つに、不失花(うせざる花)という素晴らしいことばがある。

世阿弥は、芸術的魅力的な事を花と呼んだ。

私はこのことばが好きなので座右の銘にしている。

芸術の道を歩む者は、生涯を通じて花の一枝を持ちつづけていくべきであらう。世阿弥は教える。花の一枝を持ちつづけるためには何をいっても稽古しかない。稽古とは自分をみがく作業であり、感動をもとめて未知へのまじはしをふむことなのである。

うせざる花は、雲のみに限らず日々のたつきの中にも存在する。



美しく年若いということがよく言われるが、常に喜び、感動を持ちつづける人は美しく年若いのである。

そう言う意味で、世阿弥のいう、うせざる花を心に秘めつづける人間になりたいとつねづね想っている。(平成五年十二月三日)

### 紅梅記

—平成五年回—

檜々牙々たり老梅樹、忽開華一華兩華、三四五華無敗華。

「正法眼藏・梅華の巻の巻頭にある。天童古山上宣示衆語中のこの句は、一度読んだら忘れることのできないほど美しい句で、(中略)、この老梅樹が道元の人間像と重なり合って(中略)疎(りん)然たる中に清香を発するその人が云々」(谷川徹三・「人間が生きた道元」より)。

御題小謡・波が山崎有一郎謹作

観世清和謹曲でつくられる(松書店謹製)。

上歌。ヨワク「春立ちて波間に浮かむ島山の(中略、以下四季の波を)行く年惜しむ波枕、あらたまの年に通かの希望を」

明けましておめでとうございませう。まず能楽関係者・愛好者の方々が元気で八熱田Vへ通われるように。

平成五年の回顧ですが、例年のように多事でした。しかしいつもと少し様子がちがっている。ワキ方高安流新家元誕生(高安勝久

氏。これまでの家元預り西村欽也氏逝去)名古屋の能楽養成会のみならずの歩み。狂言協議会の名古屋開創と同狂言と小舞の会の実在豪華な催し、名古屋市能楽堂建設は第二年度の進行、それに突然の事ながら、私にはそう思えて驚いたが、八熱田Vの改修工事計画の発表である(年末乱能の能組に詳細載る)。大事(大変な事)です。二種の本が出たことも特筆したい。故内藤泰二氏(宝)の「観劇」(異色の能面研究)と「狂言共同社の百年」(二冊本、千六百頁余)、後者は井上松次郎氏編で三方共同社・名古屋能界・東西から貴重。

東西では観世元昭氏逝去。会者定率とは申せ悲しいことでした。昨春の翁は、一昨年の鶴龜の帝とあわせて思い出の曲・名残りの曲となりました。

演能の方は新顔も加わり、待望の曲(道成寺八名・能楽鑑賞会V、安宅八野村四郎、同氏の会V)もひろく眼福に与(あず)かった。これは狂言にも言える。狂言協議会には殆どの主たる狂言師が集まり、狂言の広く深い味(古典の笑いと新しさ)を展開した。狂言にとって幸いのものであった。能では昨年も観世会に依然佳品が多かつ

た(演能も多々)。宝生会は東西と名古屋勢が合同で出演する形をとってきたが、新しい中堅の参加が新味を加える。さて、観世流は片山九郎右衛門氏いよいよ充実、一頭地を抜く。その野宮はすばらしかった。観世喜之氏致香を演じて愛好者を喜ばせた。観世流の乱能は盛会であった。

狂言は末広(松次郎・東次郎・千五郎。二流儀共演、狂言協議会)千切木(忠三郎・新方殿、同)。小舞京童(千之丞。父上故千作氏の至芸を思い出す)など佳。

名古屋は能も狂言もそれぞれ充実を示す。特別の意味を持つ年末の乱能は盛会であった。

東海三県抜書。愛知県。三月新城市で鑑賞講座。喜多能。八月津島新能。水上の道成寺(本田光洋)。九月西春日で狂言の会(狂言共同社、狂言礼賀・筆者)、同十月藤戸(片山九郎右衛門)。岐阜県。十月郡上八幡町でうそく能「頼錦八よりかねV」(領主の名)上演。新作能(喜多)、江戸・宝暦の農民一挽が主題(能楽タイムズ平成五・十一月号、詩人村瀬和子さん寄稿)。三重県。十一月伊勢・宇治橋たもとで道成寺記念の「大田楽」が奉納された。鶴牛の会(幸主・野村耕介。直後の東京公演により芸術祭賞を受く)。

付二、なごや文化情報2月号の拙稿・回顧と重複するところがありまますのでご了承下さい。

(小栗の日記 野村広二)

「おことわり」年賀広告の掲載につきましては紙面の都合上、掲載は順不同です。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

観世芳宏門人会  
観世芳宏  
観世芳伸

大垣浦声会  
大垣市伝馬町大垣別院  
電話(058)731-3362  
住所 京都市左京区下鴨芝本町天  
電話(075)781-7030

邦謡会  
梅田邦久  
須部一政  
清沢美和  
今沢美和  
本田美和

壺泉会  
泉嘉夫  
名古屋市昭和区山里町一〇三  
電話(052)831-3185  
西宮市甲陽園目神山町三三二五  
電話(079)814-2458

山中能舞台  
山中義滋

千代  
大阪府阿倍野区阪南町六一五八  
電話(06)692-1382

井上嘉久  
(〒603)京都市北区紫野下島田町六

大阪能楽会館  
大阪西智久  
〒530 大阪府北区中崎西2-3-17  
電話(078)231-0601

武田詠楽会  
武田欣司  
武田邦弘

名古屋淡交会  
橋岡慈観  
瀬戸三津子  
稲沢市稲島町二ノ宮六 瀬戸方  
電話(058)7-3388

下田雄三  
豊中市曾根東町四一-一二  
雄観会中部地区連合会  
名古屋和石  
一宮竹石  
岐原花石  
下原雄石  
萩原雄石  
高文之屋社中

梅若修一  
名古屋修諷会

名古屋橋岡会  
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五  
山田紀子方

松音会  
泉泰孝  
〒168 東京都杉並区宮前四一九一四  
電話(03)333-2188

春鶯会  
梅若善高  
〒565 豊中市新千里南町三丁目18-12  
電話(06)683-1785  
〒120 東京都足立区綾瀬一15-13  
電話(03)360-4174

山本章弘  
山本眞義  
豊中市本町六丁目一〇一六

初陽会  
武田宗和  
積古場 名古屋千種区今池四丁目  
15-3 浅井ビル  
電話(052)733-3736

上田観正会能楽堂  
社団法人観正会  
上田観正会  
上田田田  
上田田田  
上田田田  
神戸市長田区大塚町三丁目一ノ一四



青陽会定式能(第138期)

平成六年一月三十日(日)十時半始  
熱田 神宮 能楽殿

桑原花 月 馬場 信三 加藤 保彦  
高橋 一政 清沢 一政

能高 砂 杉江 元 河村 大 鬼頭 好信  
飯田 雅介 柳原 富司忠 竹市 学  
橋本 幸 井上松次郎

能葛 城 高安 勝久 河村 真之介 助川 竜夫  
大和舞 辻本 正樹 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛  
井上礼之助

能融 梅 須部 甫 須部 一英  
弱法師 加賀 敏彦  
山 姥キリ 古橋 正邦 大野 祐一  
狂言宝の笠 佐藤 友彦 井上 祐一 後見 井上松次郎  
前野 郁子 杉江 元 鬼頭 英二 池田 誠茂  
柳原 富司忠 大野 誠茂

附祝言 主権青 陽 会  
〔要員券〕 当日券 三千円

朝日カルチャーセンター  
開講30周年記念能楽会

二月五日(土)午前九時始  
熱田 神宮 能楽殿

名古屋宝生会定式能(第38期)

二月六日(日)午後一時始  
熱田 神宮 能楽殿

〔御来場歓迎〕  
竹内 澄子 飯田 雅介 河村 真之介 鬼頭 喜太郎  
稲川 壽一 高安 勝久 柳原 富司忠 大野 誠茂  
衣斐 正宜 橋本 幸 井上松次郎

加茂 間 佐藤 友彦

後見 玉井 博祐 竹内 淳一 竹腰 勝一  
戸田 和 地部 正代司 佐藤 耕司  
狂言 寺部 一成 佐藤 耕司

犬山伏 井上祐一 井上松次郎 後見 佐藤 友彦

養老 佐藤 耕司 辰巳 克栄  
東 北クセ 戸田 和 地部 辰巳 孝  
鉄輪 倉本 雅 鬼頭 嘉男

巴 玉井 博祐 杉江 元 河村 裕一郎 鹿取 希世  
後見 倉本 雅 地部 石森 智幸 衣斐 正直  
竹内 澄子 地部 平子 道夫 馬場 富四夫  
大野 弘之 福美 鬼頭 嘉男

附祝言

主権名古屋宝生会  
事務所 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一  
鬼頭嘉男方 電話 六二一四九三五  
〔要員券〕 当日臨時会員券 五千円

恵謳会記念大会

二月十一日(祝)午前九時始  
熱田 神宮 能楽殿

東 龜 杉田 敏子 熊谷 啓子 地部 会員一同  
北 朝岡 道子 祖父江 修一  
紅葉 狩クセ 朝岡 道子 放下 小歌 板倉 隆尾  
丸道行 岩崎喜久子 班 女アト 石川 幸子  
松 血キリ 古川美津子 鞍馬 天狗 都築 弘子

舞臺子 西王母 磯部 邦子 草子洗小町 田口 芳子  
吉野天人 沢田 房枝  
舞臺通 小町 柳野 晴美 高木 昌一  
竹生 島 鎌仲 真智子 金丸 美幸  
生井 敦子 小松 井直美  
増田 香奈枝 小田 真由美  
高橋 明美 熊谷 外茂栄 (岐阜女子大学)  
由井 京子 森田 世理子  
関沢 奈美子 小島 奈巳

舞臺子 胡 若キリ 篠田 裕子 三 輪クセ 杉山 悠紀子  
舞臺子 蝶 柳野 晴美 融 中西 やす子  
三村 恵子  
風 鳥山 油永 武田 宗和  
九道行 小笠原 賢司

仕舞 松 三村 恵子 中西 やす子  
仕舞 清 風 鳥山 油永 武田 宗和 院クセ 牛山 充  
仕舞 胡 若キリ 篠田 裕子 三 輪クセ 杉山 悠紀子  
仕舞 蝶 柳野 晴美 融 中西 やす子  
仕舞 三村 恵子  
仕舞 風 鳥山 油永 武田 宗和 院クセ 牛山 充  
仕舞 九道行 小笠原 賢司

誠交会 奥 善 助  
東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三二  
電話(〇三)三四三二二六三七番

久田観正会  
久田 徹 二  
大倉 流小波 久田 舜一郎  
松月 会 前 野 都 子  
都 会 松 山 幸 親  
松 会 馬 場 信 至  
馬 玉 木 孝 男

笙月会 中 川 雅 章  
長浜市地福寺町八ノ二九  
電話(〇五)〇六三〇番

洗心会 奥村 富久子  
千 京都市左京区永福堂西町二〇  
電話(〇七)七七〇七六七番

賀水会  
桑名賀水会  
名鉄百貨店友の会  
加賀 敏彦  
千 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九  
電話(〇三)七七七八九四五番

親修会 祖父江 修一  
多治見市日ノ出町二丁目  
電話(〇五)七三三三六五六

猶惠会 熊沢 恵美子  
名古屋市名東区平和ケ丘3-176  
日車マンション四〇四

芳韻会 稻 生 芳 雄  
半田市船入町三十一  
電話(〇五)六九〇八八二五

幸福会 近 藤 幸 江  
岡崎市鶴田本町十一番地ノ三  
電話(〇五)六四〇二五二九

重陽会 菊 池 重 郷  
大山市大山宇相生五九一六  
電話(〇五)六八〇四四一〇番

清風会 今 村 嘉 勇  
岩倉市東新町下境52-401  
電話(〇三)六六〇七二三八

恵詔会 三 村 恵 子  
千 西尾市住吉町三一十二  
電話(〇五)二五九四番

梅猶会 熊 沢 光 俱  
千 小牧市篠岡3-12-11  
電話(〇五)七九一九五八七

宝生英雄  
宝生 英 照

宝生英照

名古屋巽会  
辰 巳 孝

近藤乾之助

惠美寿会  
衣斐 正 宜

衣斐正宜後援会  
千 名古屋市昭和区御器所3-23-19  
御器所パークマンション802号  
電話(〇五)二八八二一五六〇番

松野恭憲  
千 名古屋市右京区鳴滝泉殿町一八三  
TEL(〇五)四六二二一四八番  
FAX(〇五)四六二二一四八番

松野洋樹

佐野由於

豊嶋の会  
豊嶋 三 千 春

倉本 雅  
神戸市東灘区田中町一〇一三  
電話(〇七)八四四一五五六五番

宝生流  
嘉 宝 会  
千 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

竹腰 勝 一

司 宝 会  
千 名古屋市天白区島田二丁目三〇一  
島田橋住宅三三三 電話(〇三)七三三二

金剛 永 謹

金剛 永 謹

廣田後援会  
廣田 陸 一

廣田 幸 稔

菊扇会  
後 援 会  
廣 田 泰 三

廣田 泰 三

金剛流  
松野 恭 憲  
松野 洋 樹

松野 恭 憲

豊嶋の会  
豊嶋 三 千 春



# 町入能のこと

佐藤 友彦

江戸時代には能楽は武家の式楽として整備され、四座の役者の多くは幕府、諸藩のお抱えとなり、武士階級への奉仕が義務付けられて、庶民が能楽に触れる機会は数少なく、た。こうした中で町入能は、暗れて庶民が城内に入り、表舞台で正規の能楽を鑑賞出来る数少ない機会であった。

町入能は本来將軍家において、將軍宣下、官位昇進、幼君誕生などの大きな祝事、或いは大法事の日に、一日ないし数日にわたって江戸城内の表舞台で式能が催されその第一日目に江戸の町々から選ばれた町人が鑑賞を許されたもので、これにならって各藩でも行なわれるようになった。

初めての町入能は、慶安四年(一六五二)八月に行なわれた四代將軍家綱の將軍宣下能で、この時町人の入城、鑑賞が許されたのが最初とされている。

尾張藩で最初に見られる町入能の記録は、この八年後となる万治二年(一六五九)一月末日と二月一日に行なわれた能館のようである。藩主は二代光友の治世であった。光友は慶安四年六月に藩主となっており、その直後の八月に江戸城で初の町入能となる將軍宣下能が行なわれていた。万治二年のこの前後には特に祝儀にあたる事柄も見当たらないが、歴代藩主の内でも最も能楽愛好家として知られる光友は、幕府の先例に習って早速町入能での催しを実施したものであろう。

『名古屋市史(風俗編)』によると、一月晦日、二月朔日、お城にて能館、今春八左衛門これを勤め家中諸士並びに町人も鑑賞を許さる。と見えている。また後に光友の事

跡を詳しく記した「瑞樹御事録」には、正月廿八日、名古屋御城三而御能館御付。代替初而也。御家中見物被仰付。初日御直衆、二日同心、三日寺社・御内證、今春八左衛門(法名又玄老後勤也)、高安藤太郎等勤之。として記している。ここでは町入で行なわれたことを記さないが、この後元禄三年(一六九〇)の光友大納言昇進の祝儀(町入能)の記録にもやはり町入を記しておらず、記述の省略と考えてよいであろう。さらにこの時の今春八左衛門を「又玄老後勤」と記すが、又玄は八左衛門浄玄で、実際には前年の万治元年に没しており、これもおそらく二代目八左衛門浄玄の誤りであろう。

町入能はあらかじめ町触(まちぶれ)によって人数、時刻、服装その他鑑賞の心得などが細かく規制された。江戸城での寛文四年(一六六四)二月に行なわれた時の町触では以下のように触れている。

一 明廿六日於 御本丸御能有二付、御しらす見え物被仰付候間、見物三飛出候町人、其町々割付候人数之分ハ、さかやきをそり髪を結、対のあさの上下を着し、いしやうみくろしく無之様ニ仕、明二十

六日明六ツニ(中略)御奉行衆御差圖次第、御しらす見え物被仰付候、其町々割付之外、壹人成共粉者入申候ハ、御改之上曲事ニ可被仰付候間、町中之月行事致味、相改、入可申事。

一 御しらすにて御折御菓子被下候節、眼ニはい取不申、謙て頂戴可仕候、  
一 被仰候儀有之候ハ、謙で御請可申上事、  
一 脇差一円無用之事、  
一 御能見物ニ手代出し申間敷候、自身ニ可罷出申事、  
一 御能見物ニ罷出候者共ニ、成程入念を為申間、其町々割付候人数之外、余人壹人も召連申間敷候、若殿ニ於有之は、御改之上急度曲事ニ可被仰付候間、少も違背仕間敷候以上、  
尾張藩の場合も同様な町触が出

された。事前に町総代を通じて入場者の名簿が提出されており、各自に入場札が渡された。享保十六年の宗春家督相続の祝儀の際の町触は以下のごとくである。

来月二日・三日・六日右三ヶ日、御能館御付候間、拝見三飛出候者之儀、御城西御門前迄、明六ツ時三飛出、指図を請、御白洲へ入可申付。  
一、町人共、長髪、ほうかぶりなど不仕、惣而不礼無之様ニ相慎、静ニ並居、拝見可仕事、  
一、町人共之内、既老并剃髪之者、十歳以下之者、右之輩ハ、  
一、町人共、拝見場へ帯剣不罷成候間、御門外ニ銘々脇差しもたせ置可申事。  
一、勿論之儀ニ候へ共、上下着用可罷出来。  
右之通、町中并二寺社門前町触端々迄、不洩儀ニ可被相触候。已上。  
九月晦日 花井八郎左衛門 町中町代衆 上長者町

熱田能楽殿改修募金 勸進乱能盛會



勿論袴着用が義務づけられ、長髪、剃髪ともに駄目、十歳以下の子供や極端な年寄りも拝見出来なかつた。  
元禄三年(一六九〇年)光友大納言昇進の祝儀の際にも「家中諸士鳥帽子素袍にて登城し、扶持の職人、領内の百姓等上下を着し、無刀にて拝見す」(名古屋市史)と記されており、見物の町民も袴を着していたらしい。  
同じく元禄七年の祝儀の際にも「家中の諸士見物を命ぜられる。町人は町代組頭のみ、上下を着け、丸腰にて白洲にて見物を許され、強敵を給はる」(名古屋市史)とあり、やはり袴着用である。  
また家中諸士も初日には鳥帽子・素袍、二日目からは長上下で登城、無刀で拝見している。  
こうした祝儀の際の諸士の礼装は敢しものだったようである。正徳元年の町入能の際には、中村又蔵なるものが家来とともに羽織袴姿で見物して御目付に咎められている。(鶴鶴館中記)

当日、能「安宅」の勸進帳は次のとおり。(写真)

惟んみれば熱田の宮の神の威光、日本武のみこと、草薙の御恵み、頭をたれぬ人もなし。ここに戦後の乱れある時に、さきかげて、能楽殿をば、つくり奉り東海の文化をささえ、以来四十年、舞台の傷みも目立ち涙胸を貫く。思ひを、善途に翻して、能楽殿を改修す。かほどのお舞台の、朽ちなん事を悲しみて、能楽会名古屋の支部、諸國を勸進す。一紙半銭の奉財の、人々は、此の世にては無比の樂に誇り当来にては、数千連華の上に坐せん。福命積官、敬つて申すと天も、響けと眺み上げたり。

熱田能楽殿改修募金 勸進乱能盛會

谷田宗二郎 京都府北区衣笠街道町31-7 電話(四六三)四八七五番

幸友会 幸友能 幸友能 幸友能

大倉源次郎 大阪府淀川区宮原五五一八 電話(六三九七)二二三三

富原富司忠 名古屋市中区栄 朝日神社内 電話(八三三)一〇三二番

亀井俊一 京都府京都市中京区立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

河村真之介 名古屋市中区前山町一丁目二二 電話(〇五二)七六一四八八二

飯島佐之六 京都市香林坊2-8-17

青流太鼓 金春流太鼓 青耀会 上田悟

長生会 鬼頭喜太郎 好信 大勢鬼頭英二

大藏狂言会 大藏彌右衛門 大藏彌太郎 大藏吉次郎

名古屋和泉会 大垣狂言の会 和泉元秀 和泉元彌 和泉元子 三宅藤九郎

茂山千五郎 茂山正義 茂山真吾 茂山千三郎







# 青雅日記

(148)

## ハクサンフウロ

えと文 二井栄逸

簡素で清潔な白木の舞台。削りに削られた演技に対し、逆に華美をきわめた能装束は豪華絢爛をほしめまわす。

私のスケッチ帳には、白木の舞台で催された能の舞姿がはみ出されそうになっている。名演技を描くという事は、能を後世に伝えることを悲願とする私にとって、最も大事な作業であると思つて、

能装束のことであるが、私は先年、ある旧家で、ハクサンフウロを金糸で散りばめた長絹を見せて貰ったことがあった。こげ茶色の地に金糸のハクサンフウロは素晴らしいもので感動したことを覚えている。



フウロは、風露草科の数種の植物の総称で、高山の草原に自生している。ハクサンフウロ、アサマフウロ、山梨県の郡内地方の特産であるグンナイフウロ、タチフウロ、九州の山地の特産であるイヨフウロ等、なかでもハクサンフウロは石川県の白山に産する種類

## 紅梅記

翁、年末年始、本のこと

昨年末トシボ・BS(新潮社)の「円空」と「夕顔」(白洲正子)の二冊を求めた。「夕顔」には「翁」の一文が載る。友枝喜久夫氏(喜)の素直・翁の印象が佳文で綴られる。一月下旬の「翁」(名・能楽鑑賞会、梅田邦久、八熱田)は案内を受けながら、参会できず翁の話をされるため名名の表章(おもてあきら)博士にもお目にかかれず、正月の翁はNHKテレビの元旦(親世清和)だけであった。

梅の苗(鉢)はまだ無い。昨年十二月十一日鳳の会(第五回)。五回目を記念し、秋中の能舞台を八熱田Vに移して、前二曲をみる。内沙汰(うちさた)、蔵、右近左近入おこさくV。井上祐一・菊浩。結びの素直な演じ方が大蔵流(茂山千作氏)とはちがう

けれど、同じような深い印象をうける。次は無布施経(佐藤友彦・融)。友彦所演を始めてみる。指書で勤めて淡い味わいを出す。狂言と共同社の解説書を発行。盛会。次回は四月三日、泣尼と井藤(どぶかちり)。

喜多流名を喜ぶ。主催は景清をみる会。愛知県文化振興事業団・愛知芸文C(共催)。場所は愛・芸文Cの地下ホール。粟谷・景清をみる。佳演。

### 大蔵狂言会 なごや会 (第24回)

三月六日(日) 正午開演  
熱田 神宮 能楽殿

狂言組	小舞の明星	餅	幼けたる物	大蔵 教養	大蔵 基誠	大蔵 基照
山	花井貴久子	高木久美子	丹羽理紗子	丹羽理紗子	花井貴久子	大蔵 英鼓
盆	宇治の晒	森 浩一	竹内 寛	大西 安春	保科 春美	河村 文子
鐘の音	松川 佳澄	保科 春美	河村 文子	向井 理子	上野多佳子	松田 陽子
靛	鳥居 清二	丹羽 節	大蔵 吉次郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎
猿	丹羽 節	大蔵 吉次郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎
御入場無料	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎	大蔵 弥太郎

### 能と狂言の世界—普及公演

三月十二日(土)  
熱田 神宮 能楽殿

第一部公演	午後十一時始	宝生流能楽師 衣斐 正宜
狂言口真似	井上松次郎	井上 靖浩
花	飯富 雅介	吉田 定男
月	飯富 雅介	福井 良治
衣斐 正宜	飯富 雅介	竹市 学

### 三交会大会

三月十三日(日) 午前九時始  
熱田 神宮 能楽殿

能百	松山 晃之	武田 邦弘	高安 勝久	河村真之介	鬼頭喜太郎
萬	法楽之舞	佐藤 友彦	八神 孝充	久田 徹二	中川 雅夫
附祝言	後見 梅田邦久	地謡 清高	高橋 一政	中川 雅夫	中川 雅夫

### 能花

飯富 雅介 吉田 定男 竹市 学  
後見 竹内 澄子 地謡 竹内 澄子  
後見 玉井 博祐 地謡 佐藤 耕一  
後見 井上 祐一 地謡 佐藤 耕一

### 能経

飯富 雅介 吉田 定男 竹市 学  
後見 竹内 澄子 地謡 竹内 澄子  
後見 玉井 博祐 地謡 佐藤 耕一  
後見 井上 祐一 地謡 佐藤 耕一

### 能羽

飯富 雅介 吉田 定男 竹市 学  
後見 竹内 澄子 地謡 竹内 澄子  
後見 玉井 博祐 地謡 佐藤 耕一  
後見 井上 祐一 地謡 佐藤 耕一

同九月六日 於(趣)町御殿  
松平安雲守殿御招請御能より

加茂 シテ金春八左エ門  
シテ高安彦太郎 大鼓石  
井孫三郎 小鼓高田伊  
右エ門 太鼓諸井源兵衛  
右 藤田六郎兵衛

頼政 シテ喜多七大夫 ワキ  
西村庄兵衛 大鼓大倉  
六之助 小鼓堀川喜兵衛  
右 藤田六郎兵衛

野宮 シテ喜多十大夫 ワキ  
藤太郎 大鼓金春三郎  
右エ門 小鼓大倉六蔵  
右 藤田庄兵衛

天鼓 シテ七大夫 ワキ庄兵衛  
大鼓大倉七左エ門  
小鼓伊右エ門 太鼓親  
世権八郎 笛十助

海人 シテ十大夫 ワキ庄兵衛  
大鼓三郎右エ門  
小鼓大蔵 太鼓権八郎  
笛庄兵衛

狸々 シテ田中百一郎 ワキ  
中川市十郎 大鼓孫三郎  
小鼓喜兵衛 太鼓  
源兵衛 笛六郎兵衛

狂言 大蔵八右エ門 素袍落  
野村又三郎  
米市 高橋惣吉

一般様享保十五年十一月廿七日御逝去被遊 同廿八日 上使御老中松平右近將監酒井讃岐守殿を以御家督

主計頭様之被持進之旨被仰出候由尾張藩六代目藩主権友が、享保十五年庚戌十一月廿七日に、三十九歳の若さで、逝去している。先代の五郎太が、正徳三年癸巳十月十八日、三歳で逝去し、その後を権友が継いでいる。藩主の若死にが統している。在位は二十七年になる。

享保十五年の九月六日の能は、尾張藩江戸中屋敷、四谷御門外廻町十一丁目の能舞台で催されたのであろう。

最初の能「加茂」のシテは、尾張藩能役者金春八左エ門が演じ、最後の能「狸々」のシテは、宝生流能役者、尾張藩抱の田中百一郎が演じている。間の「頼政」「野宮」「天鼓」「海人」の四番は、「喜多七大夫・十大夫が、二番ずつ演じている。喜多流の能が、とりわけ好まれていた傾向が見られる。その他、喜多流の太夫が演じる場合、シテを演じたと思われ。享保二年権友が尾張へ入国した際に演じられた「羅生門」も、ツレ役の安田伝六が、シテを演じているので、ツレ役がシテを演じている、ある程度決まっていたのかも知れない。

なお、安田伝六は、宝生流で、田中源之丞の門弟である。(名古屋屋敷に於ける)ツレ役を専門として、貞享五年綱誠に召し抱えられた。その養子又次郎は、宝生流の面影であったようである。享保十二年の泉光院御能入御能組で

### 尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏 一

「麻生」を勤めている。「御能御子留」によると、藩主権友よりも生母の泉光院の方が能が好きであったように思われる。権友が家督を継いだ正徳三年から、亡くなる享保十五年までの能役者について、簡単にふれておくことにする。

シテ方  
金春流 金春八左衛門、林喜左衛門、林真之進、林権次郎  
宝生流 田中源之丞(半平)、田中百一郎(源之丞と改名)  
金剛流 寺田門治、享保十一年、江戸で権友によって召し抱えられた。金剛流のシテが、新たに召し抱えられたのは、將軍吉宗の金剛流の好みに迎合したためであろう。金春喜左衛門の弟子で、ツレ役を主に演じていた、近藤清左衛門は、享保十五年、寺田門治のツレ役として、金剛流に改められている。(名古屋屋敷による。)

近藤清左衛門は、享保十三年二月廿七日の瑞祥院御能入御能で「忠使」のシテを演じている。ツレ役でもシテを演じていることがあり「張良」のシテ、「羅生門」のシテ、「現在病」のシテなどを演じている。この「張良」以下の三曲は、いずれも、ワキ方が活躍する能なので、ツレ役の近藤清左衛門が、シテを演じたと思われる。

享保二年権友が尾張へ入国した際に演じられた「羅生門」も、ツレ役の安田伝六が、シテを演じているので、ツレ役がシテを演じている、ある程度決まっていたのかも知れない。

なお、安田伝六は、宝生流で、田中源之丞の門弟である。(名古屋屋敷に於ける)ツレ役を専門として、貞享五年綱誠に召し抱えられた。その養子又次郎は、宝生流の面影であったようである。享保十二年の泉光院御能入御能組で

平成6年2月・3月放送

(2月) NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

20日(日) 宝生流「鉢木」渡辺三郎  
27日(日) 親世流「求塚」梅若六郎

(3月) NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

6日(日) 親世流「百万」橋岡三郎  
13日(日) 宝生流「海人」三川順久  
20日(日) 親世流「高砂」山本島久  
27日(日) 喜多流「櫻川」大島久

(祝日能・狂言) NHK教育テレビ(午前9時)

再放送

3月21日 NHKスペシャル  
「野村万作最後の釣魚」に挑む  
9時45分から狂言「釣魚」野村万作  
(日本の伝統芸能)能・狂言鑑賞入門IV  
NHK教育テレビ(午後10時~10時30分)

3月4日(金) 金春流「高砂」栗原春生  
11日(金) 喜多流「八島」栗原春生  
18日(金) 親世流「熊野」栗原春生  
25日(金) 宝生流「大江山」渡辺三郎  
4月1日(金) 大蔵流「千切木」茂山千五郎

名古屋梅猶会定期能  
三月二十日(日)十一時三十分始  
熱田神宮能楽殿  
電話〇五八七(三三)三三八八番

〔御来場歓迎〕

能頼政 菊池重郷 杉江元 吉田定男 藤田六郎兵衛  
後見 梅若善高 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能楊貴妃 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 池内幸三郎 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能船弁慶 高安勝久 寛鉢一 鬼頭喜太郎  
後見 岡田 勝久 後藤孝一郎 大野誠  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能花筐 谷田宗二 信正 藤田六郎兵衛  
後見 片山九郎右衛門 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能羅生門 高安勝久 豊嶋十郎 吉田定男 鬼頭喜太郎  
後見 松野 洋樹 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能通 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能巖 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能山 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能船 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能大蛇 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能神 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能馬天狗 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能高安勝久 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

高安勝久十四世宗家継承披露能  
三月二十一日(祝)午前十一時開演  
熱田神宮能楽殿

能巖 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能山 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能船 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能大蛇 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能神 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能馬天狗 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能高安勝久 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能通 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能巖 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能山 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能船 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能大蛇 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能神 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能馬天狗 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助

能高安勝久 飯富雅介 河村総一郎 鹿取希世  
後見 西村 高夫 地謡 梅若善高 井上礼之助  
梅若善高 梅若善高 井上礼之助











(基礎資料人名のつづき) 山田 直平 大4~13 矢留 文雄 昭24 横井 喜兵衛 大15~昭6 吉川 翠溪 昭5~6 吉田 寸作 昭8 渡辺 義雄 明42~大7 渡辺 義雄 明42~大7 (宝生流) 味岡 栄次郎 明38 淡中 晴海 大15~昭2 井沢 見山 明35~40 磯谷 洗心 明35~38 今井 竹二 大9~13 岩塚 鋼次郎 大8~9 岩塚 次夫 昭8~16 内田 源兵衛 大15~昭11 大島 為足 明35 大野 貴久 明10~11 大野 貴久 明10~11 小田 井愛三郎 明40~昭22 加藤 賢一 大3 加藤 久二 大5~9 亀井 市治 大5~14・昭3 萱野 晚秋 大2 木村 治市 明11~28 (二市・治一) 小竹 才六 明39 古春 増五郎 明16~17 近藤 源十 明16~17 近藤 不休 大2~昭14 酒井 栄次郎 明31 榎原 文翠 明36~38 坂 氏進 明36 佐野 勝秀 明39~大5 佐野 初枝 明14 鈴木 右門 昭14~26 (八右衛門) 鈴木 豊松 大13 関戸 明 大2~5 関戸 守彦 明11~16 関戸 水無三 大5~8 高橋 鈿三郎 昭36 竹内 市蔵 昭36 竹内 徳洞 大8~昭6 富田 重助 大8 内藤 錦造 大2~昭21 (水谷) (操雪) 内藤 静修(勤) 明42~大8 内藤(水谷) 宗一 昭13~25 内藤 泰二 昭25~26 中川 敏次郎 明43~大2 長尾 庸造 明36~昭17 長尾 徳徳 昭16~昭24 中根 正裕 明35~36 中松 道夫 昭14~16

中村 真管 大3~9 仁科 一雄 昭16 畑 富次(智洋) 昭22~26 林 弘 昭10~12 菱田 尚三 昭24 広瀬 兼次郎 明11~16 本田 七兵衛 明36~38 増田 庄六 昭15~16 三木 茂 昭15~16 溝口 好忠 昭3 三輪 定次郎 昭3 八尾 正平 昭5 山田 一郎 昭4 (金剛流) 青木 錫 大8 安達 文一 明44~大7 伊藤 祐民 明45 伊藤 純次郎 大3~6 今井 三郎 明44~大6 大木 喬之助 明41~大5 小川 仙二郎 明41~大7 沖 一郎 明44~大7 小栗 良平 明41~大9 小野 恒彰 大12~昭3 大木 郁治 明44~大5 大塚 一二 大13~昭26 大野 竹節(竹次郎) 明42~大6 尾崎 浪音(官一) 明10~大8 尾崎 松彦 明39~大5 尾崎 昭彦 大5~7 尾崎 玉彦 大5 萩須 延 明43~大5 片岡 信一 昭13~25 片野 東四郎 大5~昭18 加藤 式子 大5~7 河合 照子 大4~5 神戸 不言 明36~大2 神戸 太郎 明36~45 神戸 銀之亮 明16~19 (吟秋・吟春) 神戸 次郎 明41~45 北沢 繁 昭11 北沢 忠男 昭7~16 鬼頭 藤十郎 明42~大4 鬼頭 鑑郎 大2~6 加藤 錦次郎 明43~大4 島沢 柳亭 明45~大5 白木 梅夫 大13 白木 周次郎 明42~大10 白木 信平 昭7 白木 忠夫 大6~昭5 高崎 藤之助 大4~6 竹市 秀雄 昭6~26 田中 庄太郎 明36~44 高田 鈴子 明42~44 塚本 喜代彦(清彦) 大9~昭2

寺田 左門治 明10~大11 東松 松寿 明41~大9 東松 綾子 明42~大6 東松 勝子 明42~大7 中内 利一 昭13~25 野田 松雨 大2~6 日比野 宗利 明41~大4 富田 常正 昭14~16 松岡 八洲 大7~9 松下 浦彦 明41~45 水谷 重兵衛 明42~44 宮田 秀彦 明42~44 三輪 為吉 昭4 三輪 年茂 明42~大4 武藤 豊吉 大2~5 森川 幸之輔(助) 大3~11 山田 仁三郎 明41~昭26 山田 一俊 明42~大4 山田 吾一郎 明41~43 餘吾 徳兵衛 明44~大6 吉田 勲 大4~7 吉田 鋭雄 大4~7 吉田 元之助 明43~大7 (金春流) 河村 恒造 昭13 小沢 利一郎 明43~昭16 (喜多流) 内田 ふみ子(文字) 大5~8 岡村 保道(常夫) 昭10 東海 古竹 大13~昭10 東海 修一 昭10 中尾 栄一(喜楽斎) 昭10 永田 錦之丞 大5~7 久芳 村 大6~8 道家 千代子 大6~8 道家 充之 大6~8 和谷 宏(亀二郎) (ワキ方) 味岡 福蔵 明16~17 和泉 太郎 明43~昭25 (大隅啓之助) 大河内 助太郎 明11~20 小野 鏡 明43~大4 加藤 十郎 明16~33 川村 類造 明34~昭3 栗崎 清之(清次郎) 明33~昭6 黒川 光春 昭2~8 齊藤 市之亮 明43~大13 垣川 吉之丞 明16~40 杉山 弘堂(大) 大9~昭14 杉山 義敬(久之輔) 明27~大14 杉山 義潤 明16~36 鈴木 武三郎 明11 高安 滋男 大14~昭26 竹内 義男 明39~40 田中 耕吉 明33~39

玉井 隆三 大14~15 土屋 建(劍) 明43~大12 筒井 安之助 明11 寺倉 英男 昭15~18 中川 六太郎 明11 中村 敏太郎 大13~昭5 西井 淡水 明36~37 西村 愛三 明36~昭18 (杉山雲三) 西村 敏也 昭10~26 西村 弘敬 明36~昭26 (杉山亮蔵・西村龍六) 西村 大蔵(敬光) 明14~大5 藤野 健之助 明43~大8 水谷 重次郎(十次郎) 明38~43 水野 芳三郎 大11~昭6 山内 清一 大2~5 山本 金蔵(金三) 明45~大11 若山 伯二 大7~昭2 若川 憲之助 大12~昭2 井川 真己 昭16~18 興村 綴 明14 春日 井文太郎 明41~45 蒲田 安嘉 昭15 菊川 利重 昭35 木山 金蔵 昭36 小林 小五郎 大8 鈴木 繁 明45~大2 鈴木 蘇香 昭34 高木 寿雄 昭14 稻村 金一 大15~昭3 通 笑山 昭43 永井 孝吉 昭8 舟越 健一 大3~昭18 堀田 錠太郎 大12~13 吉井 孝太郎 昭8~15 山口 一男 昭14 名和 二郎 大11 西野 雀翁 昭36 西山 善太郎 昭36 沼田 正 昭24~25 深田 松翠 昭43 (笛方) 安藤 錠太郎 明18~44 青山 春雪 大12~13 飯田 具命 明16~大3 (源八・八十五) 大島 彦三郎 明43~大9 大村 英之助 明11 小川 初三郎 明11 加藤 信三 大6~15 金森 準三 大12~昭26 鬼頭 季信 昭6~26 木村 圓治 明43~大7 国井 四朗 昭4~8

小島 鉄次郎 昭14~25 佐藤 善六 昭14 柴田 善次郎 大6~12 鈴木 直恒 明14~昭16 (源吉・恒太郎・常三郎) 田島 香園 明35~大15 (健次郎・健之助) 西留 鉄太郎 明31~37 平岩 加兵衛 明11~20 藤田 清九 明18~昭14 藤田 清次郎 明16~40 藤田 清次郎 明11~昭3 (大15・3清兵衛重孝) 藤田 六郎兵衛 明10~21 藤田 六郎兵衛 大13~昭26 (豊二郎) 後藤 利吉 昭28 川島 照之 大15~昭3 佐藤 清衛 明45~大7 佐藤 由次郎 大15~昭3 柴山 英秋 大15~昭3 園部 治平 昭10 祖父江 重雄 昭8 永田 静夫 大5~7 成瀬 弥一郎 大13~15 布目 隆太郎 大4~8 三輪 善七 大13~昭2 村沢 東造 昭18 (以下次号)

名古屋観世会定式能(二回)

四月十日(日)十二時半開演 熱田神宮能楽殿 能班 梅若 六郎 森本 幸治 中村 弥三郎 吉田 定男 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛 能女 後見 小島 一英 地蔵 高橋 嘉男 久田 徹二 後見 山本 順之 地蔵 今村 嘉男 梅田 邦久 後見 山本 順之 祖父江 修一 武田 邦弘 井上 祐一 後見 大野 弘之 狂言 花盗人 井上 松次郎 井上 祐一 後見 大野 弘之 仕舞 難波 武田 邦弘 教 盛クセ 中川 雅章 笹之段 浦田 保利 地蔵 久田 徹二 占キリ 山本 順之 地蔵 梅田 邦久 山本 順一 高安 勝久 寛 飯一 鬼頭 喜太郎 高安 勝久 柳原 富司忠 鹿取 希世 井上 礼之助 須部 敬彦 中川 雅章 後見 浦田 保利 地蔵 梅田 邦久 浦田 保利 古橋 正邦 小島 一英 須部 敬彦 梅田 邦久 山本 順一 古橋 正邦 附祝言 主催 名古屋観世会 当日券 八千円(自由席)

能阿 附祝言 主催 名古屋観世会 当日券 八千円(自由席) 後見 浦田 保利 地蔵 梅田 邦久 浦田 保利 古橋 正邦 小島 一英 須部 敬彦 梅田 邦久 山本 順一 古橋 正邦 附祝言 主催 名古屋観世会 当日券 八千円(自由席)

邦謡大会 四月十七日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿 舞臺 富士太鼓 種村とし江 河村真之介 鹿取 希世 定 家 村中 惠美子 河村真之介 鹿取 希世 歌 占 高野千勢子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 大原御幸 扇野 徳七 内瀬 徳子 加藤 友次郎 明43~昭2 金森 米次郎 明11 加納 富三郎(舎人鈴三郎) 明16~21 神谷 覚三郎 明11 (以下次号) 舞臺 西行桜 高木 正之 加藤 幸平 舞臺 花 月 小沢 日出子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 野 宮 野田 博子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 融 今村 玲子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 盛 遠山 美津子 松原 幸男 舞臺 富士太鼓 種村とし江 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 遊 柳 坂野 富子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 天 鼓 森崎 紀子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 清 トモ 尾藤 英邦 五井 貞生 河合 六三郎 山田 芳郎 舞臺 熊 松 関谷 薫 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 老 野 北洞 節子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 三 早川 順子 西沢 富貴枝 舞臺 繪 馬 井上 祐枝 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 百 萬 近藤とさ子 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 弁 慶 梅田 邦久 河村真之介 鹿取 希世 舞臺 橋 石橋 佑太 半田 智子 鹿取 希世 附祝言 主催 邦謡会 梅田 邦久



### 梅若猶義師 23回忌追善能

東京・名古屋・大阪で  
梅若猶義師が逝いて二十三年忌  
にあたり、梅若猶義師主催、梅若  
会後援で「梅若猶義師二十三年忌追  
善能」が東京、名古屋、大阪で催  
される。

東京での公演では、「鶴鶴小町」  
が上演される。日程は次の通り。  
三月二十七日(日)東京・観世  
能楽堂  
九月十五日(日)名古屋・熱田  
神宮能楽殿  
九月二十五日(日)東京・観世  
能楽堂  
十一月六日(日)大阪・大阪能  
楽会館

### 大名の能

徳川美術館では、前号既報のよ  
うに四月九日から五月二十二日ま  
で春季特別展「大名の能」を開  
催、同館蔵の能楽・能面の優  
品百点を一堂に展示する。

### 平成6年3月・4月放送

- 〔3月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時～9時)  
27日(日)喜多流「櫻川」大島久見
- 〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時～9時)  
3日(日)親世流「胡蝶」坂井音重  
10日(日)金剛流「船橋」豊嶋三章  
17日(日)宝生流「満仲」金井井  
24日(日)親世流「忠度」鶴沢

- 〔日本の伝統芸能〕能・狂言鑑賞入門IV  
NHK教育テレビ(午後10時～10時30分)  
3月25日(金)宝生流「大江山」渡辺三郎  
4月1日(金)大蔵流「千切木」茂山千五郎  
〔祝日能〕NHK教育テレビ(午前9時)  
4月29日(祝)復曲能・親世流「維盛」  
シテ大観文蔵  
(姫路城三の丸広場にて録画)

### 購読料改正について のおねがい

本紙では平成二年から一ヶ年千  
円、郵送の場合千五百円のご愛読  
を頂いておりますが、経費増に加  
え、このたび第三郵便物の郵便料  
金が平成六年三月まで五〇増五十  
円、さらに四月一日から六十円と  
二段階で値上げされました。この  
ためことに恐縮ですが、やむを  
得ずきたる五月より次のように改  
訂させて頂くことになりました。  
何卒事情ご理解賜りますようお願い  
致します。

- ▽一ヶ年千円
- ▽郵送の場合一ヶ年千八百円
- ▽一部百円

なお四月末日までに前金にてご  
納入既入金、又はお申込み方は、  
納入相当期間は従来どおりとさせ  
て頂きます。

### 如月の舞台から 「宝生会」「元秀を観る会」「観世会」と 「九阜会」

竹尾邦太郎

「加茂」シテ正宜。前は水汲  
む里女の傾ましが好ましい。ツ  
リ舞一は水桶持たず、どこことな  
手持ち無沙汰に見えて給になり難  
い感じ。後シテは大飛出・赤頭・  
唐冠、金色燦然の、半切に袴袴衣  
(熨斗に着る)、幣で舞う飾りも  
強く大きい。光稲妻の、と飛返  
りさま袖を被く型、へ雨を起して  
とワキ正からスミへ陸行すること  
ろ、など正宜充分に妙味をみせた。  
(一時間30分)

「大山伏」留まればつ子世に傾  
る、を地で行く山伏・拵一と、因  
縁つけられる神僧・松次郎、の配  
役が妙。一計を案じて執り成す茶  
屋・礼之助(滋味掬すべし)は猛  
大トラ・融(好演)を手なずけた  
方を勝とする。「南無彌陀那那  
彌夜哪(トラヤ)」「経文の一部、  
「トラヤ、トラヤ」を連呼する神  
僧に慕い寄るトラ。呪文に折り伏  
せんとする山伏に襲いかかるトラ。

### 紅梅記

能と演能、  
計報、三月  
高安会

この冬は二月になって寒冷の日  
が続く。これでは三月三日のヒナ  
祭りも雪が降るのでは。桃を床の  
間に飾る。菜の花を添える。  
二月十一・十二の二日間NHK  
のテレビ芸能をよくみた。まず十  
一日建国の日、私には紀元節を呼  
んだ方が、やはり、親しみがある  
し、昔小学生の時式典のあと、  
個パンをもらって下校したものだ  
し、中学生(旧)になってからは  
屋下りのラジオで謡曲放送をきい  
た思い出を重ねて、安宅・粟谷菊  
生をみる。昨年のNHK鑑賞会  
のもの、同曲のよさを満喫する。家  
快とやさしさと格調の高さから染  
しい朝となった。主治医のM博士  
に小書がつけばシテが飛び上る処  
があった。夜になって長唄勸進帳  
をみる。唄・芳村五郎治、名調で

ど鮮やか。しかし、長刀のゆり  
ゆうと扱いて敵を追い散らす刃り  
は長刀や手に余る感じ。キリは  
物着に梨打鳥帽子・唐織脱いで白  
水衣を着け、左に形見の小太刀、  
右には笠を持つと立って常座。  
へ小太刀を衣に、とすみじみ小太  
刀を見つめてスミへ出る大きく  
左へ廻って常座で小廻り二度、下  
居して小太刀・笠を捨て、へ執心  
を帯びて賜ひ給へ、と合掌すると  
返して立ててトメ拍子。観世には  
見ないキリの具体的な表現が、女  
流博識の繊細に旨く描出され面白  
かった。(一時間10分・2月6日  
・宝生会)

「川上」シテ盲目ノ夫・元秀、  
アド妻・元弥。盲目も信心で治る  
と伝え聞いて杖を頼りに川上の地  
蔵堂に籠る元秀の、参詣人らと語  
すところ、心の昂りを騒がしい程  
の饒舌に託して、開眼させずには  
おかない気魄に溢れる。さればこ  
そ地蔵菩薩も、妻との別離条件の  
高い代償を求めたのだ、と思わせ  
る。開眼を素直に喜ぶ元弥に、事  
情を言い出しかねている元秀の、  
二者一心の心の動揺に潜む狡猾な  
冷めた風が息を詰まらせるよ  
うな日であった。

「三月一日高安会が催される。  
昨年ワキ方高安流の家元を継承し  
た高安勝久氏の披露祝賀能であ  
る。本年屈指の大能。シテ方五流  
儀出動、うち親・剛の家元と鶴之  
丞氏の能三番。勝久氏はシテ金剛  
殿氏の羅生門を演ずる。これには  
前半ワキツレに同流長老・中堅が  
居並ぶ。名古屋では新築元上澄  
郎氏(前家元・故人)も演じた。  
シテは同じく殿氏。それに続く  
とになる。期待したい。ワキ方も  
三流儀出揃う。狂言は福の神・井  
上松次郎がめで祝う。  
新築元の精進を祈る。

「夕顔」は、「随筆集・夕顔八白  
洲正子、新潮社」とお詫びして  
加筆します。(三月一日野村広二)

の能。なおワキは従前を伴わな  
ったが、浮かれ気分連れ立ち道  
中するところが、孤影のシテ(乃  
は一本の梅)にとって意義有り、  
としないだろうか。(一時間13分)

「真蟹」酒癖些か悪いシテ舞  
・信行、行き掛りでアド妻・高義  
を裏手に追い返すが、毎度のこと  
として押れ合い仄見えなくも、母  
子をだして妻を取り戻すのも、母  
性愛に訴える気持よりむしろ狡さ  
があり、それだけにキリで「祭に  
は呼ばぬぞ、呼ばぬぞ」と男。  
又三郎が涙声で連呼するの、悲  
愁一入で利いた。(26分)

「鶴野・村雨留」シテ九郎右  
衛門、萌黄赤段唐織の、枝垂桜に  
御所草文様が象徴的。文ノ段に  
逸る気持は海の彼方の故事を飛ば  
し単刀直入、病の篤いことに触れ  
てくるが、読み上げて暫し文を凝  
視し、貼り付いたように身じろぎ  
しないところが頗るなまを現わす。  
車の中は、途次の景色を左右に眺  
め、細か足使いに焦燥を感じさ  
せる。酒宴の場で舞を所望される  
や、人の気も知らないで、と言わ  
んばかりに、へ深き情を人や知る  
と涙隠すようにシテ二ノ松に  
逃げ、気を取り直して舞になると  
ころも旨い。舞上げ、へ降るは涙  
か、と扇ガサシテスミから足早に  
大きく左へ廻り込み、常座で花び  
り受けるのも、急かれ突き詰めた  
気持がそのことに集中し、一種の  
狂乱。掃蕩許されるキリには、は  
んなりとした味があった。

京の能役者にとって、「鶴野」  
の道筋はすでに馴染、目に映る風  
光も親しく一種独自の思入れも  
ある。さればこそ九郎右衛門は、  
哀愁に満ちた鶴野の心根を慈し  
み、自家薬籠中の物として、痴れ  
るような春の温気の中、ワキ宗盛  
・関にささやかな抵抗の姿勢もみ  
せて、印象深い鶴野像とした。ツ  
レ朝顔・清司、地は慶次郎・邦久  
ら、好調。(一時間37分・2月13  
日・観世会)

「清経」シテ直也、着付に萌  
黄赤段(蝶二格子文様)厚板、練  
色地破レ七宝文様の横棧大口、唐  
草文様紺細法被の出立は小粋。ツ  
レ宜夫が、へ怒めしう候、と心持  
充分にシオルのにも、形見の髪  
ことに触れることはあれ、対応は  
極く淡泊で、僅かに、へ怒むれば独  
寝の、とツレにつつと寄って袖を  
返すところが、孤影のシテ(乃  
の必然を説くクセ以下、へ待つこ  
とありや、と左へ扇を肩に受ける  
型、横笛を吹く型、傾く月を見る  
型、扇の型、へ船よりかっぱと、  
雲ノ扇の型、へ船よりかっぱと、  
の型なども旨いのない淡々とした  
印象で、苦衷少なく自己本位と思  
える深き一つの清経像だった。  
(一時間2分)

「筑紫」上納品の多寡もさ  
りながら、筑紫ノ百姓・礼之助の、  
唐物の珍しさに怯む丹波ノ百姓。  
松次郎の取り繕いぶりが可笑しい。  
めでたく納め、万難公事(まんぞ  
うくじ・租庸調)を免除されて大  
笑すれば、更に田一反に付き一笑  
いを求められ、一反半の丹波は器  
用に一笑い半。歪を頂いた勢いで  
奏者・友彦まで無理に笑わせての  
三人笑い留めも天下泰平の和やか  
さ。(30分)

「鶴」シテ喜之。前場、舟人  
の、面徑士・黒頭・濃紺黒格子  
・銀灰色水衣に袴を持ち、ひっそ  
りと出るところ、冥い洞穴のよう  
な双陣に自ずから怪しい気配があ  
り、ワキ旅僧・雅介との問答の緊  
迫感も徒ならぬ。クセ、へ頼政  
きつと見上げれば、と目付柱上を  
探るようにゆくり見詰めて、へ怪  
しき者の姿、を認めて一寸額をし  
やくるや、膝さつと立てて弓に擬  
した頭から矢を放つ神速。この緩  
急の対照が鮮烈で、以下は左右の  
手に渡り交う扇も目まぐるしく、  
射落して一気に決着つける気魄の  
凄まじさに喜之の巧技が光る。中  
入は、へいくへに聞くは、と一ノ  
松にふと停ると、へ鶴の声、で棹  
を捨て地一杯に幕入。

後シテは猿飛出・赤頭・拾法被  
・半切の姿、矢先に当たりスミか  
ら後退すると、常座で膝をつき、  
へ怒りに滅せしこと、とがっくり  
と安座に至るまでや、うつつ舟に  
流され、打杖を首楯にそり返って  
流し足に一ノ松へ往き、へ浮洲に  
流れ留、まる態に下居するキリの  
型どころなど、柔軟な身のことなし  
に充実ぶりが窺われた。アイ弘之、  
地は三郎・喜久ら、雅子を希世。  
喜正。(一時間11分・2月20日  
・九阜会)





# 五月雅日記

(149)

## 素顔と仮面

えと文 二井栄逸

能は仮面劇であるが、すべての役が面をつける理ではない。女性、又は老人の役には面をつけるが、ワキ等は素顔である。

又、雲体(神・鬼・幽霊)等には、それぞれ別の面が作られている。夢幻能では、素顔の旅僧の前に、面をつけた故人の面が現われ、互に向い合い、言葉を交わす独特の演出が、ほかでは見られない詩情をたたよわせる。

現在社会を描く現在能でも、男女が登場すれば同様のことが起こる。

あの世とのゆきまが自由になる夢幻能の中に、私は無限のひろがりを感じる。

人の心というものは、表情にあ



見せ、顔を上げれば喜びを表わす等、表情が豊かである。  
(平成六、四、五夜)

## 名古屋能楽史資料

### 能楽協会 情報提供を要望

能楽協会名古屋支部では、前号既報のように「近代名古屋の能楽を支えた人々」の刊行を企画しているが、その基礎資料の一環として、明治期より昭和二十六年頃まで活躍がみられる方々を第一次基礎資料人名として収集、各方面に広く資料、情報の提供を要望している。

本紙では、前号に基礎資料人名、その一として掲載したが、ひきつづき今号で「基礎資料人名」その二」を掲載する。

協会支部では、このほかにも収録すべき方、お気づきの点があれば、どんな些細な情報でも結構ですので、ご協力、お力添えをお願いしたいと望んでいる。

(連絡先)

〒460 名古屋市中村区下米野町三二二九 宛 鉢一  
電話(〇五二)四五五一―一九七九七

### 基礎資料人名

(その二) 前号61〜65

- 〔小鼓方〕
- 神谷武次郎 大4〜9
- 神谷 米子 大5〜9
- 川瀬 南浦 大4〜9
- 河村 泰市 明31
- 木村 二瓢(三兵衛) 大9〜13
- 園井 和雄 大5〜9
- 園井 文子 大5〜9
- 熊沢 易潤 明28
- 後藤 周作 明35
- 酒井 蔵治 明43〜大2
- 佐藤増太郎 明16〜20
- 杉山半次郎 明44〜大8

- 中島 豊吉 明10
- 中野清三郎 明16
- 奈良保次郎 明36〜39
- 二木 満 大12〜13
- 丹羽 広雄 明35〜大9
- 橋本 竹蔵
- 藤井治三郎 明14
- 福井五郎吉 明16〜21
- 福井初太郎 明16〜21
- (辰巳鉄之助)
- 福井 五郎(富雄) 明42〜26
- 穂積 寛 明14〜16
- 松坂 来 明18
- 前橋重重郎 大6〜8
- 水野 豊吉 明2
- 水谷欽次郎 明44
- 水谷大治郎 大9〜14
- 水谷 高隆 明14〜17
- 守屋 寿石(貞吉) 大4〜26
- 森島真三郎 明10
- 安岡 哲郎 明43〜大9
- 安岡 八郎 明14〜16
- 山岡 正吉 明18〜30
- 山田 耕石(耕平) 大6〜26
- 山田 浜作(浩) 明16〜19
- 吉田 宗知 明16〜17
- 和田 稻城 明14
- (大鼓方)
- 石井 一斉 明28
- 石井 孫三 明10〜11
- 石井 弥市 明10〜11
- 伊藤竹次郎(竹甫) 明43〜26
- 中島 豊吉 明10
- 大沢陽太郎 明11〜16
- 大野 慶雄 大8〜26
- (笛音風・大鼓方)
- 神戸 分衛(分左衛門) 明6〜16
- 木造 大観(風石) 大8〜26
- 小出 忠一 明14〜16
- 立松 一枝(佐枝魁) 明11〜30
- 角田銘次郎 明11〜35
- (銘二・庄兵衛)
- 永田虎之助(仙三郎) 明33〜26
- 西尾孫太郎 大2〜26
- 西田 三好 明18
- 戸次 又一 大9〜19
- (三輪伊六・定次郎)
- 松井清太郎 明38〜40
- 水野 申三 大9〜26
- (香椎堂)
- 吉田鉄三郎(方条) 明14〜44
- 吉田 秀夫 明41〜19
- 加藤彦一郎 明41〜大9
- 沢田 茂藏 明16
- 杉山 喜清 明35〜45
- 鈴木 俊一 大3〜8
- 鈴木松太郎 明14
- 竹内 倍吉 大8〜26
- 谷口茂三郎 大8〜26
- 滝本 隆一 明10〜18
- 辻村勝二郎 明14
- 永田 式子 大4〜8
- 西 東平 明18〜27
- 松山仙五郎 明16

## 豊水会春季大会

五月三日(祝) 午前九時半始

熱田 神宮 能楽殿

舞臺子 養 老 高橋 一 後藤嘉津幸 大野 誠夫  
水波之伝 河村真之介 助川 龍夫

素顔 鉢 木 榎木 真理 諸隈 良吉 早川 寛

素顔 江 口 倉知 明美 森谷 達男

舞臺子 高 砂 高橋 邦光 河村真之介 助川 龍夫  
後藤嘉津幸 大野 誠

班 女 浅見 節子 河村真之介 助川 龍夫  
柳原富司忠 大野 誠

鞍馬 天狗 秋山 宣仁 河村真之介 助川 龍夫  
柳原富司忠 大野 誠

蟬 丸 清水久美子 河村真之介 助川 龍夫  
福井啓次郎 大野 誠

天 鼓 深見 しげ 河村真之介 助川 龍夫  
福井啓次郎 大野 誠

素顔 花 筐 高橋 邦光 森谷 達男  
白井 正光 古橋 謙彦

能田 村 飯富 雅介 河村真之介 助川 龍夫  
野村 信行 藤田六郎長壽

舞臺子 弱 法 師 高井紀美子 加賀 敏彦  
諸隈 良吉 高橋 邦光 祖父江 修一

熊 井 筒 奈倉 早苗 河村真之介 助川 龍夫  
藤田六郎長壽 大野 誠

玄 象 下尾 和子 後藤嘉津幸 助川 龍夫  
藤田六郎長壽 大野 誠

素顔 俊 寛 魚住 吉彦 白井 正光

舞臺子 小 督 秋山比登美 河村真之介 助川 龍夫  
柳原富司忠 大野 誠

松 風 寺下 武子 柳原富司忠 大野 誠

杜 若 佐竹由巳子 河村真之介 助川 龍夫  
福井啓次郎 大野 誠

卷 絹 楠木 真理 河村真之介 助川 龍夫  
福井啓次郎 藤田六郎長壽

附 祝言 上野美与乃 児玉 宏

〔御来場歓迎〕 主催 豊高橋 水 際 一

## 名古屋巽会大会

五月五日(祝) 午前十時始

熱田 神宮 能楽殿

〔素顔〕 竹生島(山内テル子、近藤圭子、加藤千穂) 紅葉持(沢田美枝子、土岐静香、桜井昌子、山下知子)

〔舞臺子〕 鶴亀(後呂道子) 草子洗(安岡美智子) 小袖曾我(小島加代子、川本マサ子) 養老(玉井房子) 西王母(高木富美子) 狸々(森田俊枝)

〔素顔〕 小香(金子恵津、平野伊都子、福田左絵、赤塚龍) 松虫(清水達郎、鈴木英夫、大野尚徳)

〔舞臺子〕 高砂(楠野光子) 経政クセ(伴定子) 羽衣キリ(長瀬三枝子) 玉島(塚本照子)

〔素顔〕 敬盛(森重夫、杉浦敏二、織田哲也) 玉島(高田繁子、鈴木ゆり子)

〔舞臺子〕 絃上(杉浦隆仁)

〔舞臺子〕 巻箱(長崎邦子) 七騎落(大森尚人) 胡蝶(依田佳子) 班女(加藤美知子)

〔舞臺子〕 高砂(石原康子) 笠ノ段(夏目哲子) 難波(山本卯)

能田 飯富 雅介 河村真之介 助川 龍夫  
野村 信行 藤田六郎長壽

〔御来聴歓迎〕 主催 名古屋巽会  
愛知那東郷町和合ケ丘二―1115 戸田 和方

## 名古屋金春流友会

五月八日(日) 午前九時始

熱田 神宮 能楽殿

舞臺子 天 鼓 多田 光宏 八 島キリ 峯邑 恒士  
村ヶせ 堤 曉伸 小袖曾我 中川 敏子

舞臺子 小 丸 道行 中川 弘光 村ヶせ 小島 藍

舞臺子 天 鼓 治 広瀬 和弘 鶴 龜 鮫島 淳子

舞臺子 小 丸 道行 中川 弘光 村ヶせ 小島 藍

舞臺子 天 鼓 治 広瀬 和弘 鶴 龜 鮫島 淳子

舞臺子 小 丸 道行 中川 弘光 村ヶせ 小島 藍

舞臺子 天 鼓 治 広瀬 和弘 鶴 龜 鮫島 淳子

〔御来聴歓迎〕 主催 名古屋金春流友会  
田キリ 青山美代子

平成6年4月・5月放送

[4月] NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
24日(日)親世流「忠度」鶴沢 雅
[5月] NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
1日(日)親世流「離波」親世喜之萌
8日(日)宝生流「鶴」佐野 朋三
15日(日)金春流「水室」金春 欣三
22日(日)親世流「自然居士」片山 巖次郎
29日(日)金春流「景清」桜間 道雄
和泉流「花折」野村 万蔵

Table listing names and dates for the April and May broadcasts, including names like 山内俊一, 岡田伝七郎, 小倉次男, etc.

Table listing names and dates for the second broadcast (ラジオ第2放送) in the afternoon, including names like 梅村 万一, 小澤 豊, 内田 豊, etc.

Table listing names and dates for the third broadcast (衛星第2放送) in the evening, including names like 岡谷清次郎, 林 増次郎, 林 治九郎, etc.

狂言「鳳の会」公演
狂言「風の会」は四月二十三日(土)いりなカスケアで第六回公演を行う。午後三時開演。
狂言「泣尼」(井上祐一、井上靖彦、井上松次郎、大野弘之)
狂言「井上松次郎、大野弘之」

Table listing names and dates for the evening broadcast, including names like 岡谷清次郎, 林 増次郎, 林 治九郎, etc.

能 黒塚
狂言 難波
狂言 渡狐
狂言 二人静
狂言 龍馬
狂言 龍馬

金春流能の会
五月八日(日)午後二時始
熱田 神宮 能楽殿
名古屋金春会・春 鼓 会
トヨタ車体謡曲部・日本電装謡曲部
愛知大学能楽研究会

能 海士
狂言 龍馬
狂言 龍馬

第37回 狂言やるまい会公演
十一世 野村又三郎信英
五十回忌追善会
五月十五日(日)十二時半始
熱田 神宮 能楽殿















◆早春から晩春の各地の舞台から◆  
「大槻自主公演能」 「茂山狂言会」 「梅若  
猶義廿三回忌追善能」 「観世会」 「青陽会」

竹尾 邦 太郎

「采女・美奈保ノ伝」 シテ四  
郎・小書で、帝の寵愛を失った采  
女入水のことになった演出は、話  
をとにかくそこへ持ってゆこうと  
いうシテの情熱がひしひしと感じ  
られる。ワキ旅僧・雅之助に呼び掛  
けるところから惹きつける。請わ  
れて、と言よりむしろ、すすん  
でといった気分の自己陶醉気味な  
語り、の甘美からワキとの掛合の  
哀調は、ハシラウワリとゆつくり  
ワキにアシラウワリその極。

後シテは紺細地製目を被き、  
一ノ松に沈んでサシ踊。ハシラウ  
心の狭沢の、と被衣を脱いで立つ  
と、ハシラウとワキと、と  
ワキを見込む。面若女・襟白二・  
白地銀線落・紺色大口・浅黄長袖  
(柳柳文様)、長髪を垂らすのは

「花盗人」 シテ千五郎。大寺に  
住い致す三位と自称はしても、お  
雅児にねだられれば花を盗むのも  
厭わないという少々好色の坊主を  
熱演。縛められても意気軒昂、三  
位というだけに和歌の教養ひけら

紅梅記

一名古屋能楽  
師の資料

四月中旬庭の花も横かわり。牡  
丹・つじ・卵の花となる。紅葉  
の若葉は紅く、青葉の青も目に  
しみる。五月一日は熱田神宮舞  
神事。八日から「花の境」が催さ  
れる。

能楽協会名古屋支部では、支部  
員二名と少社の国文学者(能・狂  
言)三人で名古屋の能を支えた人  
々を調査し、人物篇・資料篇の二  
分野から資料を収集したいと書  
う。第一次は明治(起点)から大  
正をへて昭和二十六年頃迄。そこ  
あたりまでは急がねばならぬと思  
う。それにしても大事である。

なぜ昭和二十六年で切ったのか、  
八熱田V完成直後は、それ以後  
の充実も可及的速かな作業が望ま  
れよう。これらのことには今は触  
れまい。ただ名古屋の演能に当り  
東西から来演の、名人上手のシテ  
方の処遇は格別大切であろう。三  
役のこと。これを忘れてはなる

かして古歌でアド庭主・千之丞と  
激しく応酬するところなど、理非  
逆転しかねない程の気魄である。  
「当座は詠まぬ」の、「許され  
度うない」との相手を挑発しては  
また好奇心を掻き立ててゆく回り  
も、計算が在ってそれと悟らせな  
い巧妙さ。最後はお定まりの酒宴  
の賑やかさであるが、多勢物にも  
役者が揃う千五郎一家一門のアン  
ソブルの良さは披露。着に舞う千  
五郎の、ハシラウ一技を、の小舞  
「泰山府君」の意味深長も可笑し  
いが、舞い落ちると油断見すまし  
を見て静かにシテと、哀傷  
深く、寂しみのある薄幸の采女を  
沁み沁みと印象付けた。(一時間  
40分・3月9日・大槻能楽堂自主  
公演)

「清経・恋ノ音取」 シテ鎖之  
丞・音取の笛(幸政)にひかれ、  
その音と共に運び止めば停まり、  
を電一ノ松に至ると、ゆつくり  
直シ勾欄に一足詰めて深閑の中を  
行む。再び笛の音を耳にして、ゆ  
るく反応するとツレ鬼一を見込み  
節かにシテ出す。笛の音はいつ  
しか消え、シテの思はシテの  
中に重く沈潜するからである。再び  
の笛の音に運び出し、暮れから  
七分余で常座に入って来るまでの  
ためらいと決意の、心の中の葛藤  
の時の重さが感じられるように、  
右頬に剣落の今若の面は涙の乾い  
た顔にも見えた。キリに三ノ松で  
合掌し、響子の涙の跡となるまで、  
含羞の人清経の印象を強く持っ  
た。(一時間17分)

「鷗小町」 シテ盛義、亡父  
猶義への手向けの鼓。徒らに永  
らえて容色衰え、独り懐古するば  
かりのシテ小町のもとへ、昔の盛  
義を望む(二代)・豊嶋一(のち弥左衛  
門)諸氏。初代盛義は劇場能も演  
じ(取崩)講演も巧み。喜多流は  
六平太能心(先代)・実(元代)  
氏ほかで狂言共同社の追善はこの  
流儀で置かれたことがある。東西  
からの演能のよきを通じ能の真  
髓を体得した。戦後は「一流儀一  
能会」が主流となつて、今に及ぶ  
が、東西重視に変わりはなく。平成  
元一五年の間の演能第一位は観世  
流(朝長)・朝長(太・鬼頭喜太  
郎)であった。因みに戦後ある時  
期の当地シテ方を「幻のシテ」と  
呼んだことがある。東西のことば  
名古屋と併せて考える私では、  
付、東西重視のことは京都の畏  
友・M氏も同意見です。

大事業の成功を祈りたい。  
付、重ねて、百年有余の名古屋  
近代能楽史資料(歴史)と能楽師  
の資料(評伝)とは相通じかつ異  
なる。前者が基本になることは言  
うまでもない。  
秘事・逸話・美談、耳を揺らべ  
さことはまた後日に機会あらば。  
五月五日、観世元昭氏(故人)  
の班女をきく。なつかし。NHK  
(野村広二)

名を奪う帝から、慰めの一首がワ  
キ行家(関)によつて買される。  
その返歌を贈るワキとの応答は、  
歌論の高みにも至る矜持である  
が、才と色の落差を気遣うワキは  
気遣いに葉を借る舞を勧め、舞  
は却つて懐旧から深い孤独に収斂  
してゆく別離の無常である。  
三ノ松で杖にツツロギ、ハシラ  
一人、の一ノ松の寂寥は、面姥・  
襟白二・白摺箱(褪せた金ノ青海  
波文様)・淡黄色縫箱(柳三葉ト  
観世水文様)・腰巻・暗青色襦水衣  
・笠の乞食の老女。ワキに選んで  
気が配る。初回(恭行・六郎  
ら)は少々饒舌な気分になるが、  
また気分が落ち込んでゆく回り、  
細かい。即ち、ハシラウとばかりに  
白雲の、と杖に死ねる薄面遺恨、  
片手押みの、ハシラウの長髪、を  
笠に見て我が身をなぞらえ、頼り  
の杖を凝視しては都で物乞いする  
惨めにシテオリ、ハシラウの、と  
下居して笠を脱ぐ一種の放心状態  
まで、その心象を的確に伝える。

帝の一首を戴けば、固より得手  
の才気煥発。ワキとの問答・掛合  
も静かな気力は充実、ワキにア  
シラウ度毎に精彩は表われ、鷗返  
しに至つてはいつとき老いを忘れ  
させる。クセで気分が変り、ハシ  
花は名ののみならず、とひとと  
正面向いた鬱憤に耐えていたも  
のが、ハシラウと落ちぶれて、と  
背を屈める双シテの胸が切な  
い。激憤を鎮め、杖に結つてよ  
り弾みをつけるかに立つのも入  
念。物着に風折鳥帽子と小豆色長  
相(裏面散文様)を着けると、  
棲を取るなどあり、半ばに暫時下  
居クツログ序ノ舞では、老足の難  
波や老いの不器用を扇の扱いに見  
せて妙。舞上がるのと地との掛合に  
昔を偲び、ハシラウの、と左袖  
でシテの顔を見つめ、ハシラウに  
く末を象徴させて、ハシラウに  
日も暮れ行くまに、と鳥帽子・  
長相を脱ぎ、ハシラウに杖を持  
ち、キリはシテオリからワキを見送  
つてととハシラウに杖を持、  
と離す(大五郎・治・建雄)がト  
メた。風韻のある好舞台だった。  
後見は鎖之丞・泰孝・生香。(一  
時間44分)

を自覚出来ず、妻の手前ばかりを  
取り繕うのが習性となつてしま  
つたシテ太郎を、弥右衛門は一所  
懸命の武骨に演じ、虚勢の空しさ  
に一種の俳諧味をみせた。(34分)  
「鷗小町」 シテ六郎。  
小書で鷗小町は橋姫。二ノ松で、  
ハシラウの世も忘れ果てて、と鷗で  
止と腹を打つ得たりやおうの喜び  
が、燃える篝火の暗さに月明を知  
つて一ノ松に月を仰ぐ態に面テラ  
ス。と、松明と扇を捨てて双シテ  
になる。心理描写は具体表  
現に的確。中入後の一管(仙華)  
がまた良く利いて(金剛流の小書  
「無間」の「吹送り」に似る)、  
寂寥世界に後シテの出現を期待さ  
せ、黒頭・小鬼見・半切・拾得衣  
闘の姿には、習ノ働もやわらか  
くゆつたりしたものがあつた。(57  
分・3月27日・猶義23回忌追善能  
・松涛観世能楽堂)

「班女」 シテ花子・六郎の艶  
治もさることながら、ワキ吉田少  
将・弥三郎も、花子が忘れかねる  
も当然と思わせる、涼とした好い  
男。クセ中、ハシラウの来ぬ夜は積  
れども、と一ノ松先勾欄に寄り、  
ハシラウに立ち尽くして、と狂おしく  
一ノ柱に右肩寄り寄ると、扇か  
かえるように胸を抱き、ハシラウ  
に、と懐かしも切ない。梅若  
空よ、と懐かしも切ない。梅若  
自慢の、甫閑作「若女」の面が涙  
に濡れた後のように見えた。アイ  
友彦、ハシラウの音が適う。  
(一時間24分)  
「花盗人」 桜並木はワキ座。  
歌に心得あると知ってシテ盗人。  
松太郎を許すアド祐一。酒を勧め、  
キリには「されば土塵」、と一枝  
折り取つて持たせし心根のやさし  
さは人柄。(25分)  
「阿漣」 シテ勝一。禁煙区に  
網を引く卑しい人の、哀れな性を  
さらりとみせた前場に較べ、後場  
は、ハシラウの執心の網置かん、の  
なりなねちとさ。狙い澄まし、は  
しと四手沈めて竿に綱を仕掛け、  
すくくと立ち上り見下し、  
確めるかに四手見下し、  
に抜け、一ノ松に戻ると頭を取  
つて四手を見込むと暫時、よし、  
と合点するかに舞台に入つて魚を  
追い込む「立廻」に、日永作とい  
う、左眼下に鱗型の剣落のある、  
面蛙(かわず)の粘性のようなも

のを感じられた。(一時間18分。  
4月10日・観世会)  
「熊野」 シテ三津子。文ノ段  
の後半、次第に感情移入して咽ぶ  
ように涙み上げると、ふっと放心  
状態に目を上げ、再び文に目を落  
して無意識に畳むところ、丁寧な  
演出。その一部始終を凝視し、耐  
えられぬようにと立つてシテの  
後ろに下居するツレ朝顔・恵子の  
風情も哀れ。車の中は、傷心の割  
にさよならさよならさよならではな  
かろうか。(一時間30分)  
「百万」 シテ里翠。舞グセに  
吾子を思ふ一途な気持がよく表わ  
れて、やさしく母性愛に溢れてい  
たが、春の物狂に於ては少々寂し  
みが勝つた。(58分)  
「仏郎」 シテ弘之、アド田舎  
人。拙一を誰かして仕合せを得よ  
うというスッパ。それにしてはふ  
つさら棒なので失敗が予測出来、  
妙に悔めない。その真面目に願  
うとするところが味がある。(25分)  
「熊坂・替ノ型」 ワキ旅僧。  
「熊坂」 何事も無く出て、ハシラウの  
名。道行の返して運び、ハシラウの  
長髪、と常座、右ウケてワキ正に  
行く。体を廻らせ、ハシラウも暮れ行  
く日影かな、と正中を過ぎワキ座  
に来ると、シテ微二が幕内から呼  
び掛けた。高安流の習という小書  
「背野ケ原道行」は、次第の深刻  
を省き、ワキをシテの怪しさに括  
抗させるのである。さればワキは  
通世に非ず修行の克己、庵室の武  
具の不審にも怯まず、勝久器量  
見せる。はて面妖な、の気分を減  
しシテの中入。

着胸姿だけに動きも大きく、微二  
の疾風迅雷の働きは実に見事。就  
中、牛若との戦いに、ハシラウの長刀  
引きさばめ、と一ノ松勾欄に足を  
掛けて舞台を駆け、ハシラウを  
小櫃に、と舞台に戻ると、長刀捌  
きの鮮やかさは、飛び返り、膝を  
着き、長刀こねまわし、切り立て  
て目付柱に纏り寄るスピードに力  
動感溢れた。斬られて組落シに安  
座から、ハシラウにせんとて、と  
勾欄越しに橋姫へ長刀投げ捨てた  
のにも驚いた。重手に弱り、安座  
して左膝かかると、キリはワキ  
に合掌して一ノ松に抜け、ハシラウ  
白々と、と左手弱し、二ノ松で小  
回り下居すると、地(邦久・正邦  
ら)一杯に立つて留拍子。大盗熊  
坂長範の、鬱然としたスケールの  
大きな舞台だった。(一時間7分  
・4月30日・青陽会)

狂言方井上松次郎氏は、さきに  
「狂言共同社の百年」(上下二巻、  
千六百頁の資料篇)を編さん。能  
楽界に貴重な資料の集大成として  
評価されており、能楽協会名古屋  
支部からその労に對して記念品が  
贈られたが、同氏はこのたび熱田  
神宮能楽殿改修基金に寄贈され  
た。また多年にわたり熱田神宮能  
楽殿事務局として勤められた水谷  
治郎氏は去る二月二十八日付で借  
しまれて退職されたが、銀別の一  
部を能楽殿改修基金に寄付され  
た。

熱田能楽殿改修  
基金に協力寄贈  
井上松次郎氏

熱田能楽殿改修  
基金に協力寄贈  
井上松次郎氏

平成6年5月・6月放送

Table with columns for month, date, program name, and performer. Includes NHK FM Nagoya programs for May and June.







# 町入能のこと

(その3)

佐藤友彦

元禄三年(一六九〇)八月に三日間行われた光友大納言昇進の祝能については「名古屋市史(風俗編)」に番組も掲載されており、すでに本紙でも辻宏一氏が詳しく紹介されているが、今ひとつ光友の事跡を記した「瑞樹御事録」の記事を紹介しよう。

一、八月十八日、御昇進御祝儀御能御付、御前御能家中拜見被仰付管三而、雲州様、大蔵様、井竹殿、阿部様、大蔵様、合、津田市正(御小姓)、内藤頼母(御小姓)、浜島市九郎(御小姓、是ハ煩々而不出)、今春八左衛門、喜左衛門、脇井、方八御小姓、御近習、御役者、打込被仰付、京都ヨリ御雇の役者數十人御召寄、御能十一番宛御番附出来致候所二、後日二二番宛御能、九番宛御能、御前御能御機嫌も御能不被為遊、御付老中強而御改申上相止。

これによれば、囃子なども御小姓や近習衆が多く勤め、京都からも数十人の役者を呼んだことがわかる。今春八左衛門、喜左衛門の二人が連日一番ずつを勤めたほかは、すべて家中諸士がシテを勤めており、当初は光友も一番ずつ勤める予定で番組まで出来上がっていたが、体調がすぐれず、老中らの強い反対で光友の演能は実現しなかったようである。(名古屋市史ではこの部分不例により中止とされている)

完成させている。これは地裏にあたるもので、以後御女中衆の観客席となったようである。

この祝能が終つてから、それぞれに對し、以下の如く祝儀が振る舞われている。

一、八月廿九日、今度御能相濟候付、御祝儀被下置  
時服黄金三枚 寺西藤左衛門  
時服二 御作事奉行  
芝山甚五右衛門  
黄金一枚巻物外二銀十枚時服  
金春八左衛門  
銀五枚宛  
今春喜左衛門 松田又十郎  
銀三枚宛  
藤田六郎兵衛 平岩嘉兵衛  
中瀬喜右衛門 石井孫三郎  
懸下七左衛門 諸岡源兵衛  
山脇源助  
金一両 地頭 長左衛門  
銀一枚宛 地頭 不残  
銀五枚ツ、外三枚宛御祝  
京都御雇 鼓打 狂言師  
銀三枚宛外三枚宛御祝  
京都御雇 地頭 不残

今回の祝能の物奉行である寺西藤左衛門が黄金三枚、作事奉行の内藤頼母が黄金二枚に對して、太夫の八左衛門が黄金一枚銀十枚の配分を受けている。同じく太夫の喜左衛門と脇井の松田が銀五枚のほかは、囃子、狂言すべて銀三枚であり、京都雇の囃子、狂言が銀五枚で客分として優遇されている。地頭の長左衛門が金一兩を受け、太夫に続く優遇振りが目につくのも興味深い。

ところでこれらの町入能の経費はどれくらいかかったものだろうか。嘉永四年の慶勝代替の祝能の経費を記す「嘉永四年三ヶ日御能調帳」によると、二百八十兩二分とされているが、ここには文化(斎初初入部)と天保十一年(斎初初入部)の経費を併せて次の様に記している。

文化年間、天保年間(天保年間ハ格外)  
文化八年  
一、金百三兩三分式朱  
天保十一年  
一、金三百貳拾九兩貳分  
銀六匁分

これによれば文化八年に比べて天保十一年には三倍以上の経費がかかっている。番組などを比較しても特に目立った点も見られず、むしろ天保年間には文化・文政の密修に流れた風潮を改め、儉約を強行に敷いたものであつて、この出費は後年に至つても、「天保年間ハ格外」と記されるほど異常に写るものと言えらるだろう。

この間の尾張藩の政治、経済事情を少し眺めて見よう。

尾張藩中興の主とも言うべき九代藩主宗睦は寛政十一年(1799)十二月に江戸藩邸で没する。宗睦の子はいずれも早世しており後継がなかったため、すでに寛政十年の十一月に將軍家斎の娘淑姫を正室として迎えたばかりであり、翌二年の正月に藩主宗睦が誕生すると言つた後継は後継相継であつた。斎朝は八代將軍家斎の曾孫にあたり、夫人は將軍家斎の娘、尾張藩との血縁は殆どないと言わざるを得ない。時に斎朝はわずか七歳の幼少であり、また將軍の娘を迎えたこともあつてその後も江戸住まいが久しく続き、十年後の文化八年に至つて初めて尾張入部となつたものである。

また寛政十二年斎朝御封の年に市中の商人に一万兩の調達金を課し、さらに翌享和元年には半年毎に支払う利息も据え置きのまま三千兩の調達を命じ、加えて翌享和二年には町々の各家は借家に至るまで、間口割りで御用金を課している。

当時の大店開戸家の如きは九千三百兩、二千石の調達に對し利子の支払いもなかったと言ふ。藩財政の赤字は累積し、調達金は藩内外にとどまらず、遠く江戸、大阪の商人にもこれを求め、幕府からの借入金も併せて、支払うべき利子の総額だけで、文政二年には実に二万二千二百三十四兩に達していた。藩士の切米は米穀商を通じて換金される。文政年間に入ると豊作が続く米価は低落、これが下級藩士の生活を直撃することとなる。彼らの多くは馴染みの米穀商から借金せざるを得ない。藩ではこの文政二年の十二月にこれら米穀商からの借金を、無利子・五十年賦返済を命じている。こうした藩政を揺動した落首に、次のようなものが見られた。

かんたんをくだいて金をかり枕  
いぐわの夢の五十年済  
尾張入いざ事とはん御困には  
いたた殿様ありやなしやと  
十一代藩主宗睦(なりはる)は將軍家斎の十九男で、文政五年に斎朝の養子として尾張藩に入籍、同九年に元服、翌十年に斎朝引退の跡を継いで藩主となつた。度重なる儉約令の効果も見られず藩財政は極度に悪化、さらに天候不順による不作が続く、米価は急激な値上がりを示す。いわゆる天保の飢饉である。

(筆者は和泉流狂言方)

また寛政十二年斎朝御封の年に市中の商人に一万兩の調達金を課し、さらに翌享和元年には半年毎に支払う利息も据え置きのまま三千兩の調達を命じ、加えて翌享和二年には町々の各家は借家に至るまで、間口割りで御用金を課している。

この指導研究会は、小・中・高校において、実際に邦楽の生徒指導に当たっている先生をはじめ、一般の方を対象に行つた指導研究会で

## 第29回名古屋新能

八月六日(土)午後五時半開演  
熱田神宮神楽殿前  
特設舞台

入場料  
前売券三、五〇〇円・当日券四、〇〇〇円・学生券一、〇〇〇円  
チケット問い合わせは  
瀬戸三津子 TEL 〇五八七(三三)三三八八  
加藤春枝 TEL 〇五七二(三三)七一六五  
熱田神宮神楽殿 TEL 〇五二(六八二)一七五一  
出演能楽師宅・チケットびあ

附祝言  
主催 三 瀬戸三津子 加藤春枝  
主催 三 瀬戸三津子 加藤春枝

大江山  
飯富 雅介 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎  
杉江 正樹 橋本 幸 鹿取 希世  
井上 礼之助 大野 弘之

鶴亀  
鶴 今沢 美和 龜 杉江 元樹  
龜三村 恵子 橋本 幸  
島田 加賀 敏彦 後藤嘉津幸 大野 誠  
辻本 正樹 寛 敏一 鬼頭喜太郎  
將軍家斎の十九男で、文政五年に斎朝の養子として尾張藩に入籍、同九年に元服、翌十年に斎朝引退の跡を継いで藩主となつた。度重なる儉約令の効果も見られず藩財政は極度に悪化、さらに天候不順による不作が続く、米価は急激な値上がりを示す。いわゆる天保の飢饉である。

二人大名  
井上 祐一 佐藤 友彦  
井上 靖浩 佐藤 友彦

義経 中川 雅章 静 松山 晃之 江田 清沢 一政 熊井 高橋 敏一 正尊 久田 徹二  
起請文 高安 勝久之 河村真之介 柳原富司忠 鹿取 希世  
立衆 須部 幸親 本田 勲  
主権 能楽協会名古屋支部  
後援 名古屋市・熱田神宮  
当日券 三千元(前売券二千五百円)  
取扱い 市内各ブレイクアイド・びあ・能楽殿出演者宅

## 青陽会定式能(第338回)

八月七日(日)午前十時始  
熱田神宮能楽殿

養老 今村 嘉勇 後藤嘉津幸 大野 好信  
舞 雛子 鬼頭 好信  
葵 上 今沢 美和 地頭 三村 恵子  
女 郎 前野 郁子 地頭 生駒 里江  
盛 盛 杉江 元 後藤嘉津幸 竹市 学  
間 松田 高義 後藤嘉津幸  
後見 前野 郁子 地頭 今沢 美和 高橋 嘉一  
梅田 邦久 地頭 今村 嘉勇 高橋 嘉一  
賀班通 盛 松山 幸親 地頭 久木 孝男  
女 舞 アト 高橋 敏一 加賀 敏彦 敏彦  
賀 茂 清沢 一政 地頭 加賀 敏彦 敏彦  
蝶 三村 恵子 飯富 雅介 河崎 敏 鬼頭 好信  
飯富 雅介 柳原富司忠 大野 誠  
後見 今沢 美和 地頭 上野 嘉宏 今村 嘉勇  
久田 徹二 地頭 馬場 信至 清沢 一政  
近藤 幸江 里江 加賀 敏彦 敏彦

しびり 野村 信行 野村 三三後 後見 松田 高義

羽 飯富 雅介 河村真之介 鹿取 希世  
橋本 幸 福井啓次郎 鹿取 希世  
井上 靖浩 須部 幸親 前野 郁子 加賀 敏彦  
後見 三村 恵子 地頭 玉木 孝男 高橋 嘉一  
祖父江 修一 須部 幸親 高橋 嘉一

附祝言 主催 青陽会  
当日券 三千元

幸謡会

八月二十日(土)午後一時半始
熱田神宮能楽殿

養老 前野 郁子
山 三村 恵子
清 経キリ
草子洗小町 高木美智子
井筒 今沢 美和
阿漕 生駒 里翠
玉之段 瀬戸三津子

通小町 大槻 文藏
藤戸 泉 嘉夫
松山 晃之
近藤 幸江
船弁 谷田宗三郎
慶 杉江 元

附祝言 後見 武富 康之
泉 嘉夫
主催 幸
近藤 幸江
有料 会員券四千円
学生券二千円

日本に出合う
瀬戸で狂言上演
瀬戸市では、毎年、日本に出合

皇月の舞台から
「金春会」「やるまい会」「九臈会」
「名古屋清韻会」

「二人静」ワキ神楽・勝久は
太刀持のアイを伴わず、名宣ると

竹尾 邦太郎
この装束がシテの気持の在り様を

「呂蓮」シテ礼之助の、飄々

分には発揮されて、狂言の持つ高級

「釣狐」シテ信行、平成三年
八月、東京やるまい会の披露に結

「海士・鹿」シテ一、前は

「巻絹・神楽留」シテ幸江、

あらばこそ子方の浄御原天皇(大

「清水」茶の湯の水加きを汲

「國酒・白頭・天地ノ声」舟

「巻絹・神楽留」シテ幸江、

平成6年6月・7月放送
(6月)NHK・FM能楽鑑賞

徳川美術館
大名のライフスタイル展

観世流・金剛流  
宗家本発行元

# 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話075(231)1990 振替京都1-113

# 能楽の友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話(052)731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円

郵送の場合 1年1800円

一 部 100円

## 第29回 名古屋薪能

### 8月6日 熱田神宮で

能楽協会名古屋支部主催の「名古屋薪能」はことし第二十九回を迎え、きたる八月六日(土)熱田神宮神楽殿前で催される。午後五時半開演。観世流能「鶴亀」(シテ加賀敏彦、カメ三村恵子、ツル今沢美和)宝生流能「半部」(シテ佐藤耕司)狂言「二人大名」(井上祐一、井上清浩)。

### 第11回 天王薪能

7月31日 能「花月」上演  
津島で行われる「天王薪能」は、七月三十一日(日)津島地域文化広場特設舞台で開催される。主催天王薪能鑑賞会。当日は、午後四時から地元同好者による連吟、仕舞、舞、獅子、独鼓、本田光洋氏、林和利氏による「能みにみ」講座。

### 新能くるす桜

8月7日 岐阜県・大和町 岐阜県上郡大和町の明建神社の「七日祭」(なぬかびまつり)に重要無形民俗文化財「新能くるす桜」は、今回七回目を迎え八月七日(日)明建神社で催される。

### 花伝の会公演

9月6、7日2日間  
花伝の会は九月六日(火)、九月七日(水)の二日間、「現代作品による花伝の会」を熱田神宮神楽殿で開催する。内容は、舞獅子「智恵子抄」(観世流夫、片山清司)▽素齋「春愁」▽能舞「相聞」(観世流之丞)狂言「彦市」(観世流之丞)狂言「彦市」は花伝の会事務局へ。

### 演能カレンダー

〔7月〕	30日(土) 三枝会 (有料)
〔8月〕	6日(土) 名古屋新能 (熱田神宮神楽殿前) (有料)(番組①面)
7日(日) 青陽会定式能 (有料)	
20日(土) 幸陽会定式能 (有料)(番組②面)	
21日(日) 能と狂言の世界 (有料)(番組③面)	
27日(土) 衣笠正宜後援会能 (有料)	
〔9月〕	4日(日) 大衆能 (有料)
6日(火) 花伝の会第2回公演 (有料)	
7日(水) 花伝の会第2回公演 (有料)	
11日(日) 観世流能 (有料)	
15日(祝) 梅若萬三回忌追善能 (有料)	
17日(土) 九宝生会定式能 (有料)	
18日(日) 宝生会定式能 (有料)	
23日(祝) 鳳鳴会 (来場歓迎)	
24日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)	
25日(日) 和泉 (来場歓迎)	
〔10月〕	1日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)
2日(日) 名古屋能楽会 (来場歓迎)	
8日(土) 青陽会 (有料)	
9日(日) 邦陽会 (来場歓迎)	
10日(祝) 武田能楽会 (来場歓迎)	
15日(土) オール早稲田能楽公演 (有料)	

(演能変更の節はご了承下さい)

## 第29回 名古屋薪能

八月六日(土)午後五時半開演  
熱田神宮神楽殿前・特設舞台

金春流仕舞 田村 茂穂 地謡 佐久間祥夫
金剛流仕舞 富士山 牧野 元子 地謡 小島芳尚
観世流仕舞 笹之段 熊沢恵美子 地謡 前野里枝
喜多流仕舞 藤戸 長田 地謡 吉川寛二
観世流 能 加賀敏彦 後藤嘉津幸 大野 誠
ツル今沢 美和 後藤嘉津幸 大野 誠
カメ三村 恵子 後藤嘉津幸 大野 誠
鶴亀 仕舞 正樹 寛一 鬼頭喜太郎
亀 杉江 元幸 後藤嘉津幸 大野 誠
火入式 熱田神宮御宣 今井 武喜
御挨拶 名古屋市長 西尾 要
宝生流 半能 佐藤耕司
和泉流 狂言 二人大名 井上 祐一 井上 清浩
観世流 能 後見 竹内 澄子 地謡 伊藤 温通
後見 玉井 博祐 地謡 伊藤 温通
観世流 能 後見 竹内 澄子 地謡 伊藤 温通
後見 玉井 博祐 地謡 伊藤 温通
観世流 能 後見 竹内 澄子 地謡 伊藤 温通
後見 玉井 博祐 地謡 伊藤 温通

附祝言	主催 能楽協会名古屋支部 後援 名古屋市中区熱田神宮
当日券 三千元(前売券 二千五百円)	取扱い 子ヶ崎トビ、市内各プレイガイド、能楽殿
※雨天順延の問い合わせは熱田神宮能楽殿	(〇五二一六八二一七五二) 内務所



大槻清韻会 〒510 大阪市中央区上町A番七号 電話〇六(七六二)八〇五五番	鳳鳴会 〒古場 名古屋千種区今池四丁目 1513 浅井ビル 電話〇三(七三三)三七三六	幽花会 片山慶次郎 〒603 京都市北区山下花ノ木町二 503 電話四九二一五三〇二番	幽詠会 片山九郎右衛門 野村四郎	名古屋観衛会 山本勝一 名古屋正花会 山本博通 〒540 大阪市中央区徳井町一丁目三十一 電話〇六(九四二)四〇七〇番	名古屋観世九阜会 観世喜正之 観世喜正之 加藤保彦 青木武智 高橋美智 高山圭一 井上嘉久
--	--	--	------------------------	--	--



# 五月雅日記

(152)

## 菟名日処女

えと文 二井栄逸

昔、芦屋の辺に住んでいたとい  
う、菟名日処女(うなひをとめ)  
の物語りは、能の求塚の中に、美  
しく悲しく、そしてはげしく、写  
実性と象徴性を組み合わせて演出  
される。

菟名日処女は、菟名、宇奈比、  
宇名日、菟名負とも書かれ、まれ  
に見る美しい女性であったと伝え  
られている。

菟名日処女は、小竹田男(ササ  
ダオノコ)と、血沼の益荒男(チ  
ヌノマヌラオ)というわか者から  
同時に恋慕され、ある日同じ時刻  
にこの二人から思いをこめた玉簪  
を受けとる。彼女は、かなたにな  
りてはなれたの恨みをかうし、二  
人の男になびくことは出来ないの  
で、あの生田川に浮む水鳥を射止

めた方になびくとする。ところが  
二人のわかもの射た矢先は諸共  
に一つのつばきにあたってしまつ  
たという。

### 幸 謡 会

八月二十日(土)午後一時半始

熱田 神宮 能楽殿  
老 前野 郁子 河村真之介 鬼頭喜太郎  
仕舞 嵐 山 三村 恵子 柳原富司忠 大野 誠

清 経キリ 加藤 春枝  
草子洗小町 高木美智子  
井 筒 今沢 美和  
阿 漕 生駒 里翠  
玉之段 瀬戸三津子

狂言 縛 太郎冠者 野村又三郎 主 井上礼之助  
狂言 縛 太郎冠者 松田 高義 後見 野村 信行

仕舞 藤 戸 泉 嘉夫  
舞臺子 通 小町 大槻 文蔵 河村真之介 大野 誠  
近藤 幸江 谷田三朗 寛 敏一 鬼頭喜太郎  
近藤 幸江 杉江 元 福井啓次郎 鹿取 希世

能 船 弁 慶 谷田三朗 寛 敏一 鬼頭喜太郎  
近藤 幸江 杉江 元 福井啓次郎 鹿取 希世

附祝言 主催 幸 江 会  
岡崎市鴨田本町十一二三  
TEL(0564)21-2529

〔有料〕  
会員券四千円(全館自由席)  
学生券二千円

十四世喜多六平太先生が喜多会に  
お歸りになった時のスケッチで、  
今もって鮮かによみがえる感動の  
一場面である。地謡は故栗谷益三  
郎先生の名演技であったことも覚  
えている。(平成六年七月十日記)



### 能と狂言の世界 —普及公演—

八月二十一日(日)

第一部公演 午前十一時始  
熱田 神宮 能楽殿

解題「景清」について 観世流能楽師 泉 嘉夫  
狂言 引括り 野村又三郎 松田 高義 後見 野村 信行

景 清 高安 勝久 寛 敏一 鹿取 希世  
トモ黒田 博 泉 嘉夫 後藤 孝一郎 鹿取 希世

附祝言 主催 能楽協会名古屋支部  
岡崎市鴨田本町十一二三  
TEL(0564)21-2529

能 船 弁 慶 飯沼 雅介 河村真之介 大野 誠  
真之伝 杉江 元 柳原富司忠 大野 誠

附祝言 主催 能楽協会名古屋支部  
岡崎市鴨田本町十一二三  
TEL(0564)21-2529

入場料(全自由席)前売一回券二千五百円、当日券三千円  
学生券 千五百円  
取扱い市内外各ブレイクガイド、チケットぴあ  
熱田神宮能楽殿(六八二一七五二) 出演者宅

大垣浦声会  
積古場 大垣市伝馬町大垣別院  
電話(0564)731-3362  
住所 京都市左京区下鴨之本町八  
電話(075)781-7030

財団法人 鎌倉能舞台  
中 森 晶 三  
中 森 貫 太

観世芳宏門人会  
観 世 芳 宏  
観 世 芳 伸

邦 謡 会  
梅 田 邦 久  
須 部 一 甫  
清 沢 美 和  
今 田 美 和  
本 田 美 和

壺 泉 会  
泉 嘉 夫  
名古屋市昭和区山里町一〇三  
電話(052)831-3185  
西宮市甲陽園目山町三三二五  
電話(079)878-2458

山中能舞台  
山 中 義 滋

千 545  
大阪市阿倍野区阪南町六一五八  
電話(06)692-3825

武田詠楽会  
武 田 欣 司  
武 田 邦 弘

名古屋淡交会  
橋 岡 慈 観  
三 交 会  
瀬 戸 三 津 子

名古屋修 諷 会  
梅 若 修 一

下 田 雄 三  
豊中市曾根東町四一三  
電話(06)664-1113

雄誠会中部地区連合会  
名古屋 和 石 会  
一 宮 竹 会  
岐 卓 花 会  
下 原 雄 会  
萩 原 雄 会  
高 山 雄 会  
倭 文 之 屋 社

上 田 観 正 会  
上 田 観 正 会  
上 田 観 正 会  
上 田 観 正 会

名古屋 橋 岡 会  
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五  
山田紀子方

竹翠会 若 松 宏 守  
電話(0762)西宮市平松町四一九  
電話(079)231-0601

大阪能楽会館  
大 阪 西 智 久  
千 530 大阪市北区中崎西2-3-17

松 音 会  
泉 泰 孝  
千 163 東京都杉並区宮前四一九一四  
電話(03)333-2828

泉 雅 一 郎  
千 181 東京都三鷹市幸礼二一三一  
電話(0422)71-2404

春 鶯 会  
梅 若 善 高  
千 565 豊中市新千里南町三丁目18、12  
電話(06)831-7854  
千 120 東京都足立区綾瀬一、15、13、302  
電話(03)3604-1740、9

山 本 眞 義  
山 本 章 弘  
千 豊中市本町六丁目一〇一六

初 陽 会  
武 田 宗 和  
千 1513 名古屋千種区今池四丁目  
電話(052)731-3736

積古場 名古屋千種区今池四丁目  
1513 浅井ヒル  
電話(052)731-3736



（⑧面よりつづき）  
 へ通かに隔てて、とやおら床几を立って正先に出ると、腕の強さを言われて右手に頼んだ扇（縁）に一瞥を投じたところは、貴様の頭の骨が余程強いわ、の苦笑いも聞かれようかの具象表現に精彩をみせた。

ヒメ崇生がシテの肩に手を掛け、杖取ったシテが覚束無げに振り向き、最後の対面をして別れてゆくキリの余情は、シテのシオリ留に尽きた。（1時間15分）

「胸突」シテ松次郎、アド礼之助から米を借りるが、あれこれ抗弁した上に、有るから貸した、無いから借りた、の悩まれ口の屁理屈。つい手を出したアドに、これを先途と大袈裟に怪我を言い立てるシテは、アドの弱味に付け込み、元利帳消しにして更に取り返さぬの横着。当り屋など当世のトラブルメーカー共の、事故補償の取引きに似て、憎々しい松次郎とお人好しの礼之助との思の合った

観能随想 寄稿

宝生会の「野守」

「井筒」に思ふ  
 名古屋宝生会定式能（6月19日）では、かつて観能していた佐野明師の「杜若」沢辺之舞の優雅な風姿が忘れがたく、「野守」（佐野明師）の観能をわくわくした思いで待った。

先ず、作り物の塚を出さない演出であった。残念なのは、シテ野守の翁が常座に立って、「春日野の飛火の野守出でて見れば、今幾程ぞ若菜摘む」の一セいのあと、サシ、下歌、上歌を省いてしまったことである。春日野の神の神徳に對する敬虔な思い、春日野のどかな風景を舞台空間につくりあげて欲しかった。シテの謡の聞かせ所でもあると思う。

シテは、ワキとの問答のなかで、「野守の鏡」とは、影を映した春日野のたまり水のことだという。それについてのシテの語りには、昔、御狩のとき、行方がわからなくなつた鷹を水底にみつめて、そのそ

密度の濃い舞台だった。（19分）  
 「井筒」シテ孝、不快の気味で前を離れ、後を博覧、の代動。前シテの、四辺に風を聞き、水桶置いて合草するところで、挙措優にやさしく繊細。初回（富四夫・孝道ら）で、一葉薄の穂に出づる、と作物に寄りながら、視線を上げてゆき、へ草花々として、と静かに右ウケて視線を落とすところ、シテの寂しい情緒を強く印象付ける。ただ、初回を受けるワキの詞を省き、地クリからシテとの掛合に進んでクセを抜き、へげにや古りにし物語、とロンギに繞れる初で、しんみりとした幼少時から初恋への懐旧の気分は深まらず残念。シテが寂寥とした送り笛（六郎兵衛）で中入すると、アイの登場は無く直ぐ待謡になるが、これも少々忙しすぎる。

後シテはやはり面増、初冠（巻子・追懸）・襟白二・白摺箱（撫子・追懸）・金地縫箱（唐扇・花尽）腰巻・紫長絹（金武田菱）、太刀

はの木に鷹がいたのを知ったという懐かしい思い出になる。ここは杖を扱って正先へ出、水面をよくよく見込む型、最後は数歩さかたつて木の上の鷹を見上げるという型所なのである。その型所を下層したままでやり過ごしてしまわれた。「鷹は木居にありけるぞ」の上歌の後半を省いてロンギにつないでしまったので、こうなつたのだと思う。「野守」の前場の懐旧の情緒は捨てがたい。

鬼神の持つていた其の野守の鏡を見せ給えと、ワキは帯にむかっで合草する。後シテは幕の内てい出し「鬼神に横道振りなく、野守の鏡は現れたり」の地謡で走り出た。幾つも拍子踏んで舞台を大きく廻り、舞臺がある。鏡をかかげたり水平にしたりして、天上から地獄まで余す所なく映し出し「鬼神に横道を正す明鏡の宝なれ。すは地獄に帰るぞ」と、ワキに鏡を渡して地獄へ帰っていく。

「野守」の鬼神は強烈な力を持つた超越存在なのである。悪鬼の面の力感の如く、後場は迫力があるべきである。力動感あふれる表現といつても、型のうつくしさからは、ずれるものではないのだから

は傾かない。へ形見の直衣身に触れて、としみみ左右の袖を眺めるフエティズム（性的錯覚の一種）の妖しきも、胸許には緊張せず、序ノ舞は劇にさらさらとした。しかし、へ女とも見ええず男なりけり、から俄然アクセントが付き、へ業平の面影、とツツと作物に寄ると、淵を覗き伺さんばかりの勢いで井筒の左右がばと抱えて覗き込んだところや、キリの、へ潤める花の、と両袖大きく打ち合わせながら扇を左に抱き、くずおれるように下層安座したところなど、その情熱的な表現に吃驚した。ただ前後のシテが別人格ならともかく、そうでなければ同一人が一番を演じた方が好ましい。（1時間17分）

「野守・白頭」シテ萌・小母でシテ老翁の生活環境を言うサシ以下上歌までが抜け、すぐワキ雅介との問答となるのは宜しとして、シテ語りを受ける地（孝・正宜ら）の、語りの内容を敷衍する

うから、演者の動きは見事だったし、安定した舞台であったと思ふ。「井筒」は、辰巳孝師の体調がよくないとのことで後見が代役（前シテ倉本雅師）をされた。右手に数珠、左手に水桶を持って前シテ里女が登場、常座で「曉毎の開個の水……」と次第を謡う。身体はなから出てくる謡の力強さ、直接的で簡潔な能舞台に十分に拮抗して秋の夜の古寺の情景をくりひろげていく、ゆるぎない存在感である。

ところが、後シテは演者が代つたのである。狂言のアイ語りがなくなり、前シテの中入後すくなった。前シテと後シテの個性が全然違ふので、能「井筒」は、一貫性を失つてばらばらなものになつてしまった。一曲で主後見倉本師で

新古今集の一首以下も省略して、へげにや昔の物語、とロンギになるのは少々性急な感じしないでもないが、中入までのシテと地の掛合がしつくりと快調で、シテは地一杯居て橋懸にゆき、静かに中入した。

後場はノットのうちにワキは一ノ松にゆき下層待謡、戻るとシテが幕内で謡い、地の、へ鬼神に横道、でずかすかと一ノ松に出た。白頭には白頭見（或は悪尉の一種か）・唐冠・法被肩脱・紺地半切。シテは白頭に鬱然とした風格を示し、重々しい鶴木にきつぱりとした鏡の扱いに円熟ぶりを示す。ワキに鏡を渡すと飛び返つてへすはや地獄、と一ノ松にゆき、へ大地をかっぱと、拍子一つ、更に二ノ松で飛び返つて幕下（奈落）を指し、舞り留になった。（59分・6月19日・宝生会）

通してはしかなかったと思ふ。「野守」にしても「井筒」にしても、演者はすぐれた技術を持っておられると思う。舞台芸術としての能一曲を、最上のものとして能舞台につくりあげていただければ観ていただく側としては幸せなのである。能の台本の一部省略については慎重であつてほしいと願う。（嶋田都弥子）

暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せて何卒ご理解賜りますようお願いいたします。

おねがひ申し上げます。

平成6年7月・8月放送

〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）  
 24日（日）金剛流「班女」金剛永 謹門近  
 31日（日）大蔵流「伊文字」大蔵弥右衛門  
 和泉流「牛盗人」三宅右

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）  
 7日（日）故人をしのんで  
 14日（日）同上  
 21日（日）同上  
 28日（日）観世流「玄象」山本勝一

〔教育テレビ〕  
 日本の伝統芸能「能楽鑑賞入門V」  
 講師 山中玲子  
 毎週火曜日午後11時～11時30分  
 翌週火曜日午後3時～3時30分（再放送）  
 7月29日狂言「唐人相撲」ゲスト 野村耕介

<p>福王 茂十郎 〒662 西宮市名次町六番十二号 電話（〇七九八）〇七七二</p>	<p>龍吟会 藤田六郎兵衛 名古屋市中区堀下二丁目一〇番九号 電話（〇五二）五七一五七六三</p>	<p>前川 光隆 京都市右京区御室芝原町一〇の六 名古屋古場 名古屋市中区葵二丁目13番3 ツインクルガーデン前野舞台 電話九三二一八八〇六番</p>	<p>幸清会 幸義 太郎 幸正 昭 大蔵 流 大蔵 彌右衛門 大蔵 彌太郎 大蔵 吉次郎 〒215 川崎市麻生区岡上四三八一 電話（〇四四）九八七二 一八七番</p>	<p>名古屋和泉会 大垣狂言の会 和泉 元秀 和泉 元彌 和泉 淳子 三宅 藤九郎 茂山 千五郎 茂山 正義 茂山 真吾 茂山 千三郎 京都市上京区中筋通り石薬師上ル</p>	<p>宝生 欣哉 東京都練馬区小竹町一丁目一五〇一五 電話（〇三三）九七二二 七二三〇 〇三三九五五 四七九五</p>	<p>森 常好 東京都世田谷区世田谷一丁目47番12 電話（〇三三）四二六〇 四八五三</p>	<p>豊 嶋 十郎 〒171 松戸市下切五五五 電話（〇四七三）一九八二</p>	<p>谷田 宗二朗 〒603 京都市北区衣笠街道町31番7 電話（四六三）四八七五番</p>	<p>飯島 佐之六 〒920 金沢市香林坊2番8番17</p>	<p>瀬尾 乃武 〒171 東京都豊島区西池袋一丁目30番10番105</p>	<p>中村 喜彦 〒602 京都市上京区知恵 光院今出川上ル</p>	<p>谷口 正喜 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号</p>	<p>大倉 源次郎 〒592 大阪府淀川区宮原五丁目一五番八 ロイズコーポニュー大阪七〇五 電話（〇六）三九七二 三三三三</p>	<p>亀井 俊一 保忠 雄 保雄 雄 和泉 元彌 和泉 淳子 三宅 藤九郎</p>	<p>大蔵 流 大蔵 彌右衛門 大蔵 彌太郎 大蔵 吉次郎 〒215 川崎市麻生区岡上四三八一 電話（〇四四）九八七二 一八七番</p>	<p>名古屋和泉会 大垣狂言の会 和泉 元秀 和泉 元彌 和泉 淳子 三宅 藤九郎 茂山 千五郎 茂山 正義 茂山 真吾 茂山 千三郎 京都市上京区中筋通り石薬師上ル</p>	<p>狂言 共同社 狂言 やるまい会 野村 又三郎 野村 信行 〒460 名古屋市中区正木二丁目16番25 電話（三三三）七五五三番</p>
---	---	---	---	---	---	---	--	--	-------------------------------------	---	--	--	---	---	--	---	--



# 観世流・金剛流 宗家本發行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話075(231)1990 振替京都1-113

# 能 楽 の 友

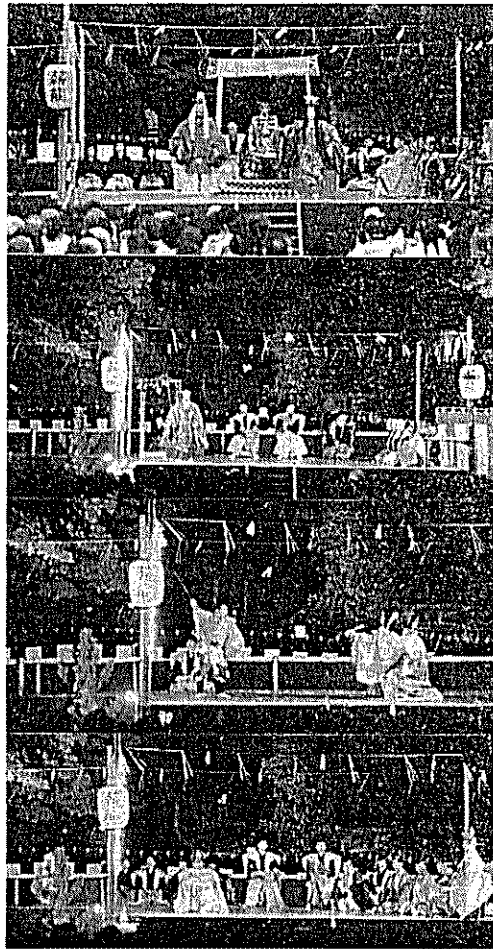
発行能楽の友社

名古屋市中区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464)  
電話(052)731-7984  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円  
郵送の場合 1年1800円  
一 部 100円

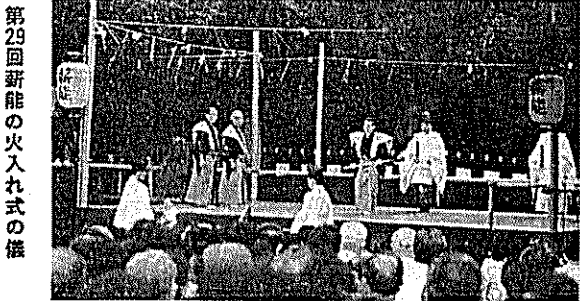
## 演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

- 〔8月〕  
27日(土) 衣裳正宜後援会能 (有料)(番組③面)
- 〔9月〕  
4日(日) 大衆能 (有料)(番組②面③面)  
6日(火) 花伝の会第2回公演 (有料)(番組②面)  
7日(水) 花伝の会第2回公演 (有料)(番組②面)  
11日(日) 観世会定式能 (有料)(番組③面)  
15日(祝) 梅若猶義師二十三回忌追善能 (有料)(番組②面)  
17日(土) 先代観世喜之進善九奉会別会 (有料)(番組③面)  
18日(日) 宝生会定式能 (有料)(番組③面)  
23日(祝) 鳳鳴会 (来場歓迎)(番組③面)  
24日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)(番組②面)  
25日(日) 和泉会 (来場歓迎)
- 〔10月〕  
1日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)  
2日(日) 名古屋卓楽会 (来場歓迎)  
8日(土) 青陽会 (有料)  
9日(日) 邦謡会 (来場歓迎)  
10日(祝) 武田謡楽会 (来場歓迎)  
15日(土) オール早稲田能楽公演 (有料)  
(演能変更の際はご了解下さい)



## 第29回名古屋新能

④から能「鶴亀」「半部」  
狂言「二人大名」能「正草」



第29回新能の火入れ式の様

## 梅若猶義師 二十三回忌 追善能

9月15日 熱田神宮能楽殿

能楽界に大きな足跡をのこし、昭和四十七年逝いた故梅若猶義師の二十三回忌追善能は今春三月東京・観世能楽堂で催され、今秋九月十五日・名古屋、九月二十五日東京、十一月六日・大阪で行われる。三月の東京公演では、梅若猶義師が「鶴亀小町」を抜き、若盛義師が「鴉小町」を抜き、九月十五日の名古屋公演は「清経・恋之音取」(シテ梅若盛彦)演能組③面)

「遊行柳・青柳之舞」(シテ岡田朗歌)「海士・懐中之舞」(シテ梅若盛彦)の公演。  
九月二十五日の東京・観世能楽堂は「小督・恋ノ舞」「定家」  
「天鼓・弄鼓之舞」、十一月六日の大阪能楽会館の公演は「安宅・御進帳・流流」「松風・見留」「恋重荷」が上演される。(名古屋公演能組③面)

鳳の会第7回公演  
9月3日 いりなかスクエア  
鳳の会(ほうのかい)は、九月三日、いりなかスクエア能楽台で第七回公演を開催する。午後三時開演。  
解説 名古屋女子大学助教授・林和利氏  
狂言「栗焼」太郎冠者・井上祐一、主・井上靖浩)  
狂言「萩大名」(大名・佐藤友彦、太郎冠者・佐藤隆、茶屋・井上礼之助)  
当日券二千五百円、会員千二百円。問い合わせ先||名古屋女子大学 学林研究室(052・852・111)ギャラリアA.C.S.(052・835・3780)井上(05613・8・6430)

幸福会 近藤 幸江 電話(0564)2529	芳韻会 稲生 芳雄 半田市船入町三十一 電話05690815	猶惠会 熊沢 恵美子 名古屋市中区東区平和ケ丘3-76 日本マンション四〇四	観修会 祖父江 修一 多治見市日ノ出町2丁目 電話(0572)3656	賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀 敏彦	洗心会 奥村 富久子 〒466 京都市左京区永観堂西町二〇 電話(05)7710767	名古屋観世会	熱田神宮能楽殿 運営委員会 熱田神宮権宮司 委員長 岡地 幸雄 委員 一同	中日文化センター 謡曲・仕舞教室(名古屋(栄)) 岐阜(四日市) 翠 謡 会 生駒 里翠 名古屋市中区東区社が丘3-1503 電話(052)703157	重陽会 菊池 重郷 大山市大山宇相生五九一六 電話(0568)4501番	清風会 今村 嘉勇 岩倉市東新町下境52-101 電話(0567)7238	惠忍会 三村 恵子 〒465 西尾市住吉町三十一二 電話(056)552594	梅猶会 熊沢 光俱 〒465 小牧市篠岡3-12-11 電話(056)791958	近藤 乾之助 〒170 東京都豊島区巣鴨五-13-18	惠美寿会 衣斐 正宜 〒466 名古屋市中区東区御器所3-23-19 御器所パークマンション802号 電話(052)882156	衣斐正宜後援会 〒466 名古屋市中区東区名歌三-26-26 電話(052)586112	豊嶋能の会 豊嶋 三春	司 宝 会 名古屋市中区白区島田二丁目三〇一 島田住宅三三〇電話(052)7372	幸友会 涛華能 福井 啓次郎 福井 良久 福井 良久 柳原 富司 忠	高安流岡同門会 清水 康利 高坂 晴蔵 森野 三郎 北野 耕三 塩田 弘三 村山 弘三 中川 湖 伊藤 久 谷口 雅信	岡次郎右衛門 向日市上植野町地田一ノ五四 電話(052)934124	和島富太郎 〒665 宝塚市武庫川町5-45-203 電話(079)78808	大阪喜多会 和調会 和島富太郎	金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川 周子	具竹会 鉦 一
------------------------------	---	---	--	-----------------------------------	--	--------	---	--	---	--	--	--	--------------------------------	--	--	----------------	---	---	--	--	---	-----------------------	---------------------------------	------------

# 木 雅 日 記

(153)

## 木 雅 日 記

えと文 二井栄逸

木雅(むくげ)の盛りです。むくげは朝に開き、夕にしぼむはかない命ですが、それだけに瞬を楽しむ尊さがあります。私はむくげを絵にもかき、花にも生ける貴重な友達のように思っています。花の咲き方にも色々あり、花弁も細弁型、中弁型、広弁型があり、一重咲き、半八重咲き、八重咲きがあります。私はやはり中弁型の一重咲きが一番好きです。種類も色々ありますが、私は、大徳寺白(だいとくじしろ)と音器の色は、暖かい南國の海の色で、色花は使っておりません。花

### 第10回 衣斐正宜後援会

八月二十七日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

#### 宝生流と私

宝生 和英

#### 観世流の丞

辰巳満次郎

### 能 西 王 母

宝生 和英

飯富 雅介

高安 勝久

橋本 幸

井上 祐一

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

河村真之介

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

河村真之介

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

河村真之介

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

### 能 山 姥

東川 光夫

杉江 元

飯富 雅介

辻本 正樹

佐藤 友彦

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

河村真之介

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

河村真之介

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

河村真之介

後藤 孝一郎

大野 誠

助川 竜夫

### 附 祝 言

一般 五千元

学生 二千元

主催 衣斐正宜後援会

事務所 名古屋市中村区名駅3-26-26

TEL 052-586-1120

平松昌彦方

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

### 第36回 大 衆 能

九月四日(日) 熱田神宮能楽殿

#### 〔一部〕午前十時半開演

祖父江修一

梅田邦久

見留

風 高安

後藤孝一郎

藤田六郎兵衛

野村又三郎

八神 孝光

久田 芳雄

古橋 正邦

泉 嘉夫

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

### 能 松

観世流

後見 今沢 美和

河村 晴久

地蔵 本山 幸親

高橋 孝一

久田 芳雄

古橋 正邦

泉 嘉夫

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

### 能 清

金剛流

仕舞 清

後見 今沢 美和

河村 晴久

地蔵 本山 幸親

高橋 孝一

久田 芳雄

古橋 正邦

泉 嘉夫

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

高橋 孝一

### 附 祝 言

当日券 三千円(前売 二千五百円)

学生券 千五百円

前売は市内プレイガイド「びあ」・熱田神宮能楽殿

(〇五二六八二一七五) 出演者宅

(〇三) 面にづく

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120

TEL 052-586-1120



す。むくげを一輪に生ける時は葉の使い方に一考を要します。色花を使うのでしたら、水引、秋明菊等がよいでしょう。然るに一門かどを並べ、果葉枝を連ねしよそおい、真に插花一日の栄に同じ、とは能、数感のサシの一句にもありますように、全盛をほこった平家の没落をたどえたもので白居易の詩の一句です。(平成六、七、二〇記)



<p>桂 後藤 孝一郎 嘉津 幸</p>	<p>富 柳原 富司 忠</p>	<p>河村 総一郎 河村 真之介</p>	<p>吉 田 定 男</p>	<p>金春流太鼓 青耀会</p>	<p>長生会 鬼頭 喜太郎 好 信</p>	<p>助川 龍夫 助川 治</p>	<p>朝日カルチャーセンター 唯子教室</p>	<p>能楽写真 ウシマド写真工房</p>	<p>能楽の友社</p>	<p>葵心庵舞台</p>	<p>栄能楽舞台</p>
<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>	<p>千602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇五)一三三二一</p>

平成6年8・9月放送

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)  
 28日(日)観世流「玄象」山本 勝一  
 〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)  
 4日(日)観世流「松虫」梅若 万紀 夫助 汎門  
 11日(日)宝生流「三輪」近藤 乾之  
 18日(日)金春流「爽盛」高橋 誠  
 25日(日)観世流「松風」片山九郎 右衛門  
 〔能楽鑑賞再放送ラジオ第2(午後5時~6時)〕  
 9月15日(祝)観世流「融」関 根 祥 六章  
 9月23日(祝)宝生流「松上」高橋 誠  
 〔テレビ・祝日離 教育テレビ(午前10時予定)〕  
 9月23日大名屋敷の薪能・立花家お家松園  
 観世流・半能「杜若」梅若 六郎はか  
 (9月15日の能放送はありません)

〔二部〕午後二時半開演

能世流 三井寺 飯富 雅介 河村総一郎 鹿取 希世

後見 前野 郁子 地謡 上野 嘉宏 高橋 正邦

盛 盛 長田 鶴 地謡 中村 衛正 森 健

狂言 薩摩守 佐藤 友彦 井上松次郎 後見 井上礼之助

能世流 葵 三村 恵子 熊沢恵美子 上 杉江 元 吉田 定男 鬼頭喜太郎

後見 梅田 邦久 地謡 黒田 幸親 中川 雅章

附祝言 主催 能楽協会名古屋支部 後援 愛知県・名古屋市長

現代作品 花伝の会 第2回公演

九月六日(火)午後六時半開演 九月七日(水)午後一時開演

鼎談「現代における能楽の創造」 能世流之丞/大蔵源次郎(六日)/能世流夫(七日)/藤田六郎兵衛

高村光太郎「智恵子抄」より 舞臺子 智恵子抄

光太郎・能世流夫・智恵子・片山清司 (笛)藤田六郎兵衛(小鼓)後藤嘉津幸(六日)

清水睦祐(七日)・(大鼓)山本哲也 (地謡)能世流之丞、青木道喜、西村高夫、柴田稔(七日)

菅川龍之介「相聞」より 能舞相聞 女・能世流之丞、(笛)藤田六郎兵衛(小鼓)大倉源次郎

(六日)成田達志(七日)、(大鼓)河村真之介 (地謡)能世流夫、杉浦豊彦(六日)上田拓司(七日) 片山清司、味方玄(六日)柴田稔(七日) (後見)青木道喜、西村高夫

本下順三作、武智鉄三演出 狂言 彦市ばなし

彦市・茂山千五郎(正義改め)、天狗の子・野村信行 殿様・茂山千作(千五郎改め)、笛・藤田六郎兵衛

主催 花伝の会 総合企画 藤田六郎兵衛 九月十一日(日)十二時半始

入場料(全自由席)一般六千円、学生三千円、会員四千円 取扱い花伝の会事務局(052・953・6264)

各チケットぴあ・熱田神宮能楽殿(052・682・1751) 能三 輪 指股雅之助 寛 敏一 鬼頭喜太郎

後見 梅田 邦久 地謡 須部 南 武田 邦弘 後見 井上松次郎

狂言 萩 大名 井上礼之助 佐藤 友彦 後見 井上松次郎

能天 鼓 高安 勝久 河村真之介 久田舜一郎

附祝言 主催 名古屋観世会 当日券 八千円(自由席)

梅若猶義二十三回忌追善能

九月十五日(祝)正午開演 熱田神宮能楽殿

能清 連吟 雨 月 梅若 盛彦 中村弥三郎 福井啓次郎

能遊行 柳 中村弥三郎 河村総一郎 藤田六郎兵衛

能遊行 柳 中村弥三郎 河村総一郎 藤田六郎兵衛

狂言 無布施施 井上松次郎 井上祐一

仕舞 通小町 藤井 徳三

梅若 盛彦 高安 勝久 吉田 定男 鹿取 希世

主催 梅若 若 盛彦 九月十七日(日)午後一時開演

指定席(正面)一万円、自由席七千円、学生席三千円 取扱い熱田神宮能楽殿(052・682・1751)

能菊 慈童 杉江 元 吉田 定男 鹿取 希世

能隅 田川 飯富 雅介 河村総一郎 藤田六郎兵衛

能望 月 高安 勝久 寛 敏一 鬼頭喜太郎

能生田 敦盛 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

能班 女 倉本 雅 杉江 元 吉田 定男 鹿取 希世

名古屋宝生会定式能(第38期)

九月十八日(日)午後一時始 熱田神宮能楽殿

能船 弁慶 村瀬 純 山崎 哲生 助川 寛夫

能山 姥 山下 恵美子 松井 弘 武田 文志

附祝言 主催 武田 志 房 会

(入場無料・御来場歓迎)

狂言 塗 大野 弘之

竹内 澄子 飯富 雅介 寛 敏一 助川 龍夫

主催 名古屋宝生会 事務所 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

九月二十三日(祝)午前九時半始 熱田神宮能楽殿

能綾 鼓 飯富 雅介 寛 敏一 助川 龍夫

能神 歌 千才 木本 仁之 木下 義国

能高 砂 矢野 義章 大坪 重遠 佐藤 正弘

能支 象 村上 郁子 長谷川 京子 村上 清

能楊 貴妃 村瀬 純 河村総一郎 藤田六郎兵衛

能善 知鳥 吉田 明 安福 建雄 藤田六郎兵衛

能辛 都婆小町 三川 祐平 武田 志房 武田 宗和

能船 弁慶 村瀬 純 山崎 哲生 助川 寛夫

能山 姥 山下 恵美子 松井 弘 武田 文志

附祝言 主催 武田 志 房 会

(入場無料・御来場歓迎)





発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円

郵送の場合 1年 1800円

一 部 100円

# 能 楽 の 友

眼とメガネを  
考える

2F 眼科  
クリニック

1F  
メガネ

スギウラ

岡崎・康生通東  
☎(0564)21-1072代

## 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

〔9月〕

23日(祝) 鳳鳴会 (来場歓迎)  
24日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)  
25日(日) 和泉会 (来場歓迎) (番組①面)

〔10月〕

1日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)  
2日(日) 名古屋能楽会 (来場歓迎) (番組①面)  
8日(土) 青陽会 (有料) (番組②面)  
9日(日) 邦舞会発表会 (来場歓迎) (番組②面)  
10日(祝) 武田鑑賞会 (来場歓迎) (番組③面)  
15日(土) オール早稲田能楽公演 (有料) (番組③面)  
22日(土) 猶恵会秋の大 (来場歓迎) (番組③面)  
23日(日) 誠交会秋の大 (来場歓迎) (番組③面)  
30日(日) 郁風会大 (来場歓迎) (番組④面)

〔11月〕

3日(祝) 幸友会秋の会 (来場歓迎)  
6日(日) 松邦会大 (来場歓迎)  
11日(金) 正花会 (有料)  
12日(土) 正花会 (来場歓迎)  
13日(日) 観世会定式 (有料)  
19日(土) 猶生会大 (来場歓迎)  
20日(日) 宝生会定式 (有料)  
23日(祝) 和泉会大 (来場歓迎)  
26日(土) 清久会大 (来場歓迎)  
27日(日) 久田銀正会大 (来場歓迎)

〔12月〕

3日(土) 壽華能 (有料)  
4日(日) 歳末助け合い協賛能 (有料)  
11日(日) 豊泉会能 (有料)

(演能変更の際はご了承下さい)

## 国民文化祭みえ94

### 能フェスティバル薪能

10月30日 伊勢市で開催

三重県では、今夏七月から「まつり博・三重」(世界祝祭博覧会)が開催されているが、これとともに今年九回国民文化祭みえ94の一環として「能フェスティバル薪能」が、十月三十日(日)伊勢市の三重県総合競技場体育館特設舞台上で盛大に催される。

国民文化祭は、全国の人たちが各地で行っている美術、音楽、演劇、伝統芸能、文芸など日ごろの文化活動の成果を全国的な規模で共演、交流する文化の祭典。能フェスティバルのテーマは、古より、ありき、能楽の源流を求めてしをかがり、第一部「能楽の源流を求めて」

源流を求めて」第二部「全国能楽愛好者演能」第三部番外(特別出演)の三部で構成。午後二時から午後八時まで催される。能フェスティバル「薪能」番組

狂言「石神」(茂山真吾、茂山千三郎、茂山千五郎) 能「清経」(シテ広田泰能、ワキ谷田宗二朗、笛・光田洋一、小鼓・曾和尚、大鼓・井林清一、後見金剛殿、宇高通成、地謡金剛永謙、松野恭彦) 入場券1部完四千五百円(当日券五千円)学生券二千円 申込みは伊田後援会 ☎075・781・1885、781・3421、金剛能楽堂 ☎075・221・3049 (平日10時17時)

京 第八十三回伊田後援会 能は十月二日(日)金剛能楽堂で開催される。 狂言「花籃」(曲)広田泰三 仕舞「花籃」(曲)広田泰三 伊田後援会 10月2日 金剛能楽堂

## 和泉流狂言大会

九月二十五日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿

狂言組

末広かり 果報者丹辺 文彦 太郎冠者 佐藤 政行

仏師 スッパ足立 米子 田舎者 能登香泉恵

柑子 太郎冠者 小野 豊子 主人 矢田三千代

文荷 太郎冠者 加藤 弘 主人 藤田 茂樹

謀生種 朝 安原 美枝 伯 父林 朝子

痺り 太郎冠者 林 泰礼 主人 佐藤 友彦

蝸牛 山 伏石 黒 生子 太郎冠者 金子 路江 主人 能登香泉恵

佐渡狐 越後の百姓 角岡 淑子 奏者 増山 幸司

悪坊 悪坊 コレルクマル 亨 主人 藤田 茂樹

盆山 盗人 小柳 保志 何 某井上 清浩

祐善 祐善 中北宇多子 在所者 金子 路江

竹生嶋参 太郎冠者 山田 弘子 主人 増田 昭典

因幡堂 男 矢田三千代 女 増田 幸司

六地藏 スッパ 長谷川 寿美子 スッパ 中西 純子

釣針 太郎冠者 二村 敏勝 女 加藤 弘

主権 狂言 共同社 (終演予定 十七時十五分)

## 名古屋能楽会秋季大会

十月二日(日)十二時半始 熱田神宮能楽殿

番組

安達原 諸隈 良吉 駒瀬 直也

鷺鷥小町 橋本とも 親世 喜之

班女 野田 道子 筑紫 敏一

三井寺 深見 一枝 筑紫 敏一

井筒 飯富 雅介 河村総一郎

網ノ段 諸隈 良吉 高橋 保彦

天鼓 太田 正子 高橋 保彦

自然居士 深見 しげ 河村総一郎

望月 子方 外山 圭一 親世 喜之

山姥 浅井 銚二 五木田武計

附祝言 観世 喜之 (終了 五時半頃)

主権 名古屋能楽会 (要証者略個所有)

観世 喜之 (加藤保彦方)

電話 〇五二(六一)三六五九

主権事務所 名古屋親世九奉会

電話 〇五二(六一)三六五九

電話 〇五二(六一)三六五九

電話 〇五二(六一)三六五九

電話 〇五二(六一)三六五九

電話 〇五二(六一)三六五九

# 玉雅日記

(154)

## 楊貴妃

えと文 二井栄逸

楊貴妃には玉雅(タマダレ)という小書があるが、これには私に於いて忘れ得ぬ感動の一幕がある。関東大震災で焼失した喜多



の玉雅をお舞いになったのである。その時の宮から、玉雅をわけて出られる姿が水際立って美しく、当時の能楽評論にこの模様を書かれた能楽家の西田三好氏の手記をお借りして見る。

「あれ過去遠々の昔を思えば、からサシになり、クセを舞い、序之舞になる。このあたりの動きは品位が高く、また一面哀愁の情に満ち、余人に見られない独特の古格ある喜多芸で高麗なものであった」

かすだれを分けて出るその容姿には他流に見られない美しさがあつた。 X X X 「それ過去遠々の昔を思えば、からサシになり、クセを舞い、序之舞になる。このあたりの動きは品位が高く、また一面哀愁の情に満ち、余人に見られない独特の古格ある喜多芸で高麗なものであった」

図は其の時の写生をもとにした素描画であるが、私は能楽の各演技を集めた私の素描画集をつくることを心に決めた。(平成六年九月二日)

### 補巖寺世阿弥碑 建立10周年記念

8月8日 講演と仕舞奉納 奈良県磯城郡田原本町にある補巖寺に「世阿弥参学之地」の記念碑が昭和五十九年八月に建立されたことはその十周年に当たり、去る八月八日、有志による参拝と仕舞奉納の行事が行われた。

当日は世話人表章、山本勝一、山本真義、奥田順一、前西芳雄の諸氏の呼びかけで、東西の能楽研究者約三十数名、地元からも二百人が参加、午後一時補巖寺に集合した。(前西芳雄氏から通信)

### 名古屋観衛会秋季大会

十月十日(体育の日)午前十時半始

名古屋市中区栄五丁目六-四

栄能楽ビル四階(女子大小路)

電話(〇五二)二六二二一八三

- 高砂 河村信重 山本博通 山本章弘
- 吉野天人 山内由美 太田和子
- 通小町 足立奈々子 伊藤一枝
- 定家 伊藤秀子 給村とみ
- 正尊 河村栄重 河村浩太郎 山本百郎 山中節子 滝川一司
- 恋重荷 育柳イッエ 上遠野ひな子 駒形賀津子

- 班 女アト 水野たづ子
- 景 清 斎藤光裕
- 松 独 豊住雅子
- 隅田川 河村浩太郎 木方洋 川久保彰礼 今村一夫
- 拈 脇田喜美子 中川芳子 川瀬まよ子
- 鉢 原田一平 伊藤健一郎
- 木 佐藤正次
- 和 香外 独吟 河村禎二
- 菊 香外 仕舞 山本勝一
- 附祝言 主催名古屋観衛会 指導山本勝一

### 青陽会定式能

(第438回)

十月八日(土)十二時半始

熱田神宮能楽殿

- 能巻 松山幸親 虫キリ 生駒里翠 地謡 三村恵子 近藤美和子
- 能丸 近藤幸江 橋本元幸 河村総一郎 鹿取希世
- 能井 井上礼之助 後藤孝一郎
- 能道明 寺 武田邦弘 地謡 加藤保彦
- 能鉄井 輪筒 今村嘉男 地謡 高橋一英
- 能瓜盗人 井上祐一 佐藤友彦 後見井上松次郎
- 能阿 小島一英 高安勝久 河村真之介 大野龍夫
- 能阿 後見 近藤幸江 地謡 前野郁子 加藤保彦
- 能阿 中川雅章 地謡 松山幸親 加藤保彦
- 能阿 後見 中川雅章 地謡 松山幸親 加藤保彦
- 能阿 後見 中川雅章 地謡 松山幸親 加藤保彦

### 邦謡会発表会

十月九日(日)午前九時半始

熱田神宮能楽殿

- 能三 山 武藤弘子 川合延子
- 能求 塚 若原積雄 田中純一
- 能頼 水波之伝 老宮川千尋 河村真之介 助川龍夫
- 能頼 政井上 苑枝 河村総一郎 藤田六郎兵衛
- 能松 西川喜代子 高安勝久 河村総一郎 助川龍夫
- 能松 後見 武田欣司 地謡 須沢一政 河村和重
- 能松 後見 武田欣司 地謡 須沢一政 河村和重
- 能松 後見 武田欣司 地謡 須沢一政 河村和重
- 能松 後見 武田欣司 地謡 須沢一政 河村和重
- 能松 後見 武田欣司 地謡 須沢一政 河村和重

### 平成6年9月・10月放送

- 〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
- 25日(日)親世流「松風」片山九郎右衛門
- 能楽鑑賞再放送ラジオ第2(午後5時~6時)
- 9月23日(祝)宝生流「絃上」高橋章
- テレビ・祝日能教育テレビ(午前10時予定)
- 9月23日大名屋敷の薪能・立花家お松海園
- 親世流・半能「社若」梅若六郎ほか
- 〔10月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
- 2日(日)親世流「安達原」泉嘉夫 嘉太郎
- 9日(日)宝生流「柳井」朝倉桑太 哲生
- 16日(日)喜多流「給井」藤井久子 雄
- 23日(日)親世流「遊行」藤井久子 雄
- 30日(日)大蔵流狂言「花子」茂山千作・千五郎
- ~襲名披露公演から~
- テレビ・祝日能教育テレビ(午前10時~11時30分)
- 10月10日 大蔵流狂言「花子」ほか
- 茂山千作・千五郎
- ~襲名披露公演から~

- 能狸 梅田邦久 丹羽久子 高安勝久 河村真之介 助川龍夫
- 能狸 梅田邦久 丹羽久子 高安勝久 河村真之介 助川龍夫
- 能狸 梅田邦久 丹羽久子 高安勝久 河村真之介 助川龍夫
- 能狸 梅田邦久 丹羽久子 高安勝久 河村真之介 助川龍夫
- 能狸 梅田邦久 丹羽久子 高安勝久 河村真之介 助川龍夫



武田謡楽会秋季大会

十月十日(祝)午前九時始

Table listing performers and roles for the Wada Utaigaku Autumn Festival. Roles include 舞臺子, 仕舞, 素舞, 舞臺, 舞臺子, etc. Performers include 熱田 神宮, 栄 武田, 川村 芳昭, etc.

早稲田大学演劇博物館 振興基金支援公演 能と狂言

十月十五日(土)午後一時始

Table listing performers and roles for the Noh and Kyogen performance at the University of Tsukuba. Roles include 第一節, 第二節, 第三節. Performers include 熱田 神宮, 鳥越 文蔵, etc.

猶惠会秋の大会

十月二十二日(土)午前十時始

Table listing performers and roles for the Yūei Kai Autumn Festival. Roles include 東, 忠, 東, 忠, 東, etc. Performers include 熱田 神宮, 熊沢 恵美子, etc.

岐阜誠交会秋の大会

十月二十三日(日)午前十時始

Table listing performers and roles for the Gifu Makoto Kaikai Autumn Festival. Roles include 舞臺子, 素舞, 舞臺, etc. Performers include 熱田 神宮, 山田 きよ, etc.









# 古川久先生を偲ぶ

古川先生の年賀状は、葉書の中央に名刺大の枠を置き、中央に氏名、左側に住所と電話番号(古くは無し)、年賀(古くは無し)の年賀、そして氏名上方にこれだけが赤で「春」の本字が印刷された簡潔なものであった。切り抜けばそのまま名刺になり、ファイルすれば年賀の代りにもなるものだった。



年賀状とは古めかしいが、江戸時代の川柳集「俳風柳多留」に「あがるなといわぬばかりの年賀」の一句がある。近現代に至ってそれは年賀の名刺受けとなり、名刺交換会となって今日に至るが、葉書に名刺を刷りこむ着想は先生独自のものばかり思っている。

ところが一昨年偶々東京大手町の通信総合博物館で年賀状の展覧会を見た時、先生と瓜二つのもので見つけてびっくりした。氏名は夏目金之助、即ち漱石である。古川先生は能と狂言の分野での研究があまりにも有名なためもあり、漱石のことはつい看過されがちであるが、東京堂刊の「夏目漱石辞典」、岩波の「漱石全集・索引」の立派な仕事があり、それ以外に

も岩波文庫の「梅屋」尾崎雅彦著「百人一首一話」の校訂の業績があることは余り知られていないのが残念である。昭和五十一年の年賀状だけは、珍らしい名刺スタイルではなく、「賀春元旦」とあって「今年春には『漱石全集』索引と『狂言辞典』事項編とが刊行される予定である」ともに十数年かけた仕事で肩の荷の軽くなる気持です。次は「梅若実伝」にかりたく老来いよいよ先生の御冥福を切にお祈りする。(竹尾邦太郎)

## 観能随想

### 劇能二曲

#### 「望月」と「鬼界島」

観世喜之助が先代の十七回忌追善(9月17日)で、手向けとして「望月」を演じられた。甲斐という宿屋の主人になって、望月という宿屋の主人になって、望月の妻(ツレ)と子(志)と、敵のワキ望月が偶然泊り合わせ、旧主の妻を助けて敵討ちをするという内容の能である。舞台が宿屋の一室になると、襦袢は、宿の外と違って登場したワキとアイ(従者)のやりとりの場になったり、またワキが通された部屋(舞台)に対して、別の部屋として敵討ちの打合せの場所に使われたりする。襦袢を十分に使い、演技の場所を広くして筋を劇的に運んでいっている。

「望月」は若手として、シテの獅子舞が見どころとされているが、そこに至るまでの道筋では、

シテの風格が能の面白さを左右する。喜之助の甲斐の主人友房は、端正な動きで誠実な人間像をえがいていた。シテとしての品格も表現されていた。獅子舞は切れ味よく見ごたえがあり、ツレも子方も好演であった。

第十回名古屋能楽鑑賞会(9月24日)は、能「鬼界島」(粟谷菊生)、舞「獅子」(枕草子)(友枝昭世)など、喜多流の方々の来演、狂言は「空院」(茂山干作)であった。

喜多流の舞台は、かちととした端正な舞台である。舞「獅子」は、白足袋が舞台に吸いつくように、すうつ、すうつ、と微動だにしない上体を移動させて、借物の品性を見せてくれた。

「鬼界島」のシテ俊寛は、黒の水衣に花帽子、「俊寛」の面も憔悴した感じではなく、羽介な感じであった。シテは右手に水桶をもつて登場、シテ、ツレ三人で水を酒として汲みかわす。往時の栄華をしのんで「落つる木の葉の盃。飲む酒は谷水の、流るるもまた涙水桶を持って面をわずかにめぐら

## 後藤新蔵氏逝去

栄能楽舞台を建設した後藤新蔵氏(後藤新蔵グループ会長)は十月二日午前九時十八分、大動脈瘤のため死去。享年八十六。告別式は五日、日蓮寺普門閣で執り行われた。喪主長男卓郎氏。故人は観世喜之助に師事、能楽の研さんとともに振興に意をつくし、愛好者一般に利用できる能舞台の建設を計画、昭和四十九年九月、約百五十人収容できる栄能楽

舞台(名古屋市中区栄五丁目)を完成。現在社中会、稽古会、また教室として活用されている。氏は名古屋邦楽協会、名時会のメンバーでもあり、また福祉的な社会事業にも幅広く献身、その功績が顕彰されている。

## ちくさ正文館

観世流謡曲本  
ちくさ駅前  
電話01137

## 名古屋観世会定式能(五回)

十一月十三日(日)十二時半開演  
熱田 神宮能楽殿

井筒 高安 勝久 河村総一郎 藤田六郎兵衛  
後見 小島一英 地謡 松山幸親 古橋正邦  
関根祥六 清沢一敏 梅田邦久  
狂言 佐藤友彦 佐藤融 後見 井上礼之助

小鍛冶 飯富 雅介 吉田定男 鬼頭喜太郎  
後見 武田邦弘 地謡 高島良一 中川雅章  
片山慶次郎 加藤保彦 梅田邦久  
善知鳥 関根祥六 地謡 小島一英 正邦  
殺生石 梅田邦久 地謡 古橋正邦

名古屋 猶調会秋の大会  
十一月十九日(土)午前十時始  
熱田 神宮能楽殿  
盛 龍沢 光俱 河村総一郎 鹿取 希世  
遠藤 武雄 福井啓次郎  
伊東 順 日比野辰巳  
梅田 てる 下郷みどり

天鼓 伊東 順 日比野辰巳  
梅田 てる 下郷みどり  
若河合 敦子 河村総一郎 助川 竜夫  
成経 梅若 善久 松久 素子 藤田六郎兵衛  
康頼 梅若 基徳 梅若 修一

舞子 遊 行 柳 奥田 敏子 河村総一郎 助川 竜夫  
舞子 遊 行 柳 奥田 敏子 河村総一郎 助川 竜夫

## 名古屋宝生会定式能(第38期)

十一月二十日(日)午後一時始  
熱田 神宮能楽殿

山姥 武坂 節子 河村総一郎 助川 竜夫  
花 立本 昌子 福井啓次郎 藤田六郎兵衛  
丸 飯富 雅介 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛  
後見 梅若 善久 地謡 梅若 善久 井上 生香  
井戸 和男 岡田 晃一 梅若 修一

野鼓 梅若 盛彦 柳原富司忠 助川 竜夫  
守 梅若 盛彦 吉田定男 助川 竜夫  
後藤孝一郎 鹿取 希世

能是 崎道行 玉井 博祐 辰巳満次郎  
山ノ段 倉本 雅 地謡 辰巳満次郎  
佐藤 耕司 戸田 和 馬場富四夫  
稲川 寿一 辻本 正樹 吉田定男 鬼頭喜太郎  
後見 倉本 雅 地謡 近藤 良三 馬場富四夫  
竹内 澄子 中島 静美 衣笠 正男 喜直

附祝言 主催名 古屋宝生会  
臨時会員券 五千元  
学生券 二千元  
事務所 名古屋市中区川名本町二ノ五一  
鬼頭喜男 電話七六一一四九三五

秋の清謡会(十七)

十一月二十六日(土)午前十時始  
熱田神宮能楽殿

番外仕舞鶴

連吟 田村

清沢 一政  
丹下 操  
奥村 小浪  
高見かね子

素弱法師

清水 慶蔵  
十倉 成己  
加藤 茂代

葵天鼓師

大久保早苗  
山本 博子  
長谷川龍子  
吉村 春枝

連吟 輝

丸 深谷 和子  
伊藤 節子  
水越 弥生  
伊藤 節子  
深谷 紀子

仕舞 雨

月キリ 神谷 直市  
正キリ 奥村 直男  
藤原 小浪

大半 江

山中入前 深谷 和子  
三輪 藤枝 磯部三枝子  
高橋 千晴

素藤 藤

戸 鬼頭みゆき  
鬼頭 英二  
鬼頭 英二  
鬼頭 英二  
鬼頭 英二

舞鶴子 難

波 鬼頭 英二  
鬼頭 英二  
鬼頭 英二  
鬼頭 英二

五段 花

月 水越 弥生  
柳原 富司忠  
竹市 学

葛 城

服部 玲子  
柳原 富司忠  
竹市 学

独調 忠

度 手嶋 なみ江  
福井啓次郎

舞鶴子 道

明 磯部三枝子  
河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

松 松

風 山口 耕造  
柳原 富司忠  
竹市 学

松 虫

林 和子  
鬼頭 英二  
竹市 学

五段 連

吟 紅 狩 伊藤 孝治  
都築 照治

舞鶴子 卷

絹 大久保早苗  
福井啓次郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

通 小

町 手嶋 なみ江  
福井啓次郎  
藤田 六郎兵衛

遊 行

柳 小林 美和子  
河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

仕舞 菊

童 金原 幸典  
金原 典子  
高橋 千晴  
山本 博子

花 羽

衣キリ 高橋 千晴  
山本 博子

舞鶴子 天

鼓 不破 修子  
河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

山 姥

岩田 加代  
河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

立廻 坂

梅田 邦久  
河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

番外 熊

河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

舞鶴子 熊

河村 総一郎  
鬼頭 喜太郎  
藤田 六郎兵衛

附祝言

主催 清沢 一政  
主催 清沢 一政

〔御来場歓迎〕

補佐 梅田 邦久  
電話〇五六四一五二一九〇九

新秋の舞台から(その一) 第36回大衆能「花伝の会」

竹尾 邦太郎

「三井寺」シテ幸江、役の人格に透って女流のやさしさに溢れる。舞臺を得て三井寺に急ぐ後場、湖(うみ)山の行まいに比べてゆいのは人の心、鳥獣でさへ親子の情を知るものを、と一ノ松勾欄に立って右上左下を見て我が身に思いを致し、舞臺に入ると焦躁の足拍子四ツから狂おしくカケリになる。切なかつた。(1時間30分)

「薩摩守」いつの世にも駄洒落はあるが、忠度(只乗り)と付けて現今も通用するのは薩摩の場合、歌には非ず、文字通りの秀句であれば生半(なまなか)な頭では使えないだろう。さればシテ旅僧・舟、泰直に無智を曝け出せば無賃乗船も厭味がなかつた。ア下舟頭・友彦。(29分)

「養上・梓ノ出」シテ惠美子。嫉妬の胎を氣位の高さに押し隠し、梓の弓の口寄せに引かれてひっそりシオリながら一ノ松に出来る姿がよい。破れ衣に這る方ない思いを寄せ、鞍(長柄)に取りつくように下居し、勾欄に左手掛けて右手にシオリところは自制も利かない口惜しさである。クドキはツ(巫女(恵子)との連吟で理屈には合わないが、追憶が懐みと照らされ、低い調の連吟は、シテの耳朶に聴れて増幅され、陰に籠もって響く効果を上げるようである。はしたなく病臥の装束を打ち捨てた興奮で心慄更に充進する枕ノ段は、数拍子や面道に痛症を直截に表現して性(さが)をみせる。

後シテは先の唐織を被いてワキ(元)の背後に廻り、立って腰に巻くと橋際で脱ぎ捨てるのが隣落シのようで面白かつた。(49分・9月4日・大衆能二部)

舞鶴子「智恵子抄」光太郎に曉夫、智恵子は清司、昭和60年8月、六郎兵衛が市芸術奨励賞を受賞した記念公演のときは、慶次郎と曉夫だった。九年振りの再演で

わいの殿様もさきながら、千五郎の、親譲りの賑やかな雰囲気、頼才が市役に近い、信行もベテランに互して大奮闘である。就中、水中で格闘するところは可笑しかつた。なお天狗ノ子にはそのものずばりの面が使用されたが、付き過ぎではなからうか。(52分・9月7日・花伝ノ会)

「三輪」シテ志勇。面深井の、慎ましやかな前場の、淋しい風情がよい。そこに、山居のワキ玄寶(雅之助)の氣持を惹くものがある。シテが夜寒に誘う衣も手ずからは渡さず、無造作に床に置いて押しやる。後シテは面増・黒風折・緋大口・紫長相の端麗。クセの、男の行方知るのに、裾に縫い付けたる糸を頼りに作物前から正先へ出てゆくときの、扇の微妙な型が美しい。神樂が直つて幣を扇に替へ、位進んで袖を被いて廻るところ、また舞上げて上ゲ扇でスマへゆき、ハ神は踏なく入り給へば、と扇で面を隠すところ、さらりとやつて滑々しい舞台だった。(1時間20分)

「萩大名」シテ大名・礼之助。実利には敵く勝訴は得ても、無趣味無教養を取り繕う知ったかぶりを出して才走った太郎冠者(扇)を狼狽させる。荒洋とした素朴な人柄が憎めない近來得がたい田舎大名で、礼之助の巧まぬ好演が光る。(29分)

「天鼓」シテ鎮之丞。面は鼻下も植毛の垂れる鎮之丞の名物。小作阿古父尉・暗青色小格子厚板・茶褐色水衣の姿。三ノ松に出、いつまでこの老の身を、と呻吟するシテは、力無く床几に掛けるとサン以下終始沈痛に面曇らせ、子を先立てた愛き世をかこち、涙の乾く暇もないとシオリ、長らえたる命を恨んでシオリと、人々に破解した苦渋が響く。シテは、松に下居するが、我が子に聞かせることと聞かせる依怙地の氣分になるシテも、強権発動のワキ子との絡みも中々、ワキの、洞鳥帽子・白大口・拾符衣の、和様は流儀決め、居クセの後、ハ急いで鼓打つべし、と励まされてシオリ

解くシテは、地(曉夫・邦久ら)との掛合に作物へゆき、ハ心も危きこの鼓、と渾身の力をこめて打つ。そこに小鼓(舞一郎)の、一打が利き、心耳と澄まして身じろぎもしないシテが、虚脱したように退つて握を取り落すところも感動的だった。安座双シオリとなつたシテはアイ袖一に送り込まれ、後シテは半切に拾法被せ下ゲ。楽(がく)は舞で舞い、半ばから唐扇に替へた。袖が返るところなどは大きく風を煽って喜悅の躍動感に溢れ、キリの型どころも脱ぎ下ゲの効果充分、颯爽として鮮やかだった。(1時間36分・9月11日・観世会)

「清経・恋ノ音取」入水の知らせをもちたすワキ津津三郎(福王流の弥三郎)、「や御声にてござあり候に候」と、ツレの在宅確認めから後見座にゆき後見に笠を手渡すが、一ノ松で笠を取り落す高安流との、ワキの心の在り様は微妙。シテ盛彦、品の良さと同時にどことなく危うい線の細さが、一生を終えた清経に似合ひ、クセの型など美しかったが、キリの修羅道の闘争場面には更に力強さが欲しかった。クセ前、ハ弱り果てぬる、と軌を一にしてツレの体調がひどく悪化したよう、それも因に違いない。笛は六郎兵衛。(1時間10分)

「遊行柳・宵柳ノ舞」シテ朗歌。赤茶けた髪がいかにも郎の老人で、秋風に吹かれ飄々と居る趣や、中入での連ビの少しくしやくした感じに苦功をみせる。引廻シ(巻金色)取られ、ハ現れ出でたる、後シテは面敷削・白垂・柳寂風折・薄茶色大口・くすんだ萌黄色単符衣の洗く上品な姿である。ハ一連生、と静かに作物を出ると、クセから舞へ朗歌の充実ぶりは照し銀の光彩を放つ。ハ春に数ある、と右足軽く踏んで爪先に目を落すのは鞠を蹴つた感趣味わうかであり、ハ手扇の虎、はゆつくり左から右へ曳いた。クセ切に、ハよわく、と、と退り、更に左手で作物の柱を掴むと地一杯縮つて居るところは、老いの哀しみの様なものが沁々と伝わり、老いが素直に出た杖ノ舞の閑寂味も引き立つ。キリは、ハよろこ

男ら)と相俟ち流れるような軌跡には、珠奪り競争とでも言ったスビード感が水際立っていた。後シテは面泥顔・黒頭・龍戴・濃緑地金鱗箔・群青色大口・赤地舞衣(牡丹唐花立派文重折)。常座で子方(紀子)を見てシオリ、所謂泣けて順廻り逆廻り、左袖返シ右受けて三鼓(富司忠・定男・喜太郎)の流シで小廻り幕際、再び流シで戻ると大小前に沈み、ここで左袖戻して懐中の経を子方に渡すと舞上げた。後味のさっぱりとした美しい舞に先代への報謝が籠っていた。(1時間30分・9月15日・観世23回追善能)

短信 新作能面展 朝日カルチャーセンター面打ち教室による「第16回新作能面展」が十一月六日から十二日まで朝日カルチャーセンター朝日ギャラリー(名古屋市中区栄・丸栄スカイル十階)で開催される。

目生きた設備を誇る日進堂  
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要ときには数分でピクアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなどに生きた設備の充実を心がけています。  
目にも優しい全神経を集中する日進堂  
メガネ店の技術をささえるもの—それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。  
徹底した日進堂のアフターサービス  
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。  
定休日 毎週木曜日  
正しいメガネでしあわせを……  
日進堂  
◎駐車場完備 名古屋市西区那古野2-20-23(円頓寺本町)  
451 TEL (571) 6181-3



発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円

郵送の場合 1年1800円

一 部 100円

# 能 楽 の 友

若い御二人の門出に  
ふさわしい結婚式場

## 名古屋若宮八幡社

各種会合や宴会にも御利用下さい

(駐車場完備)

名古屋市中区栄3丁目35-30 電話 (241) 0810

### 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

(11月)

- 19日(土) 猿 会 大 会 (来場歓迎)
- 20日(日) 宝 生 会 定 式 能 (有料)
- 23日(祝) 和 泉 会 大 会 (有料) (番組①面)
- 26日(土) 清 泉 会 大 会 (来場歓迎) (番組①面)
- 27日(日) 久 田 銀 正 会 大 会 (来場歓迎) (番組①面)

(12月)

- 3日(土) 清 泉 会 大 会 (有料) (番組③面)
- 4日(日) 歳 末 助 け 合 い 協 賛 能 (有料) (番組③面)
- 11日(日) 和 泉 会 大 会 (有料) (番組③面)

[平成7年1月]

- 3日(火) 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部 初 演 式 (能楽協会関係者)

(能楽協会関係者)

- 7日(土) 名 古 屋 学 生 能 楽 連 盟 (来場歓迎)
- 8日(日) 狂 言 鳳 凰 会 大 会 (有料)
- 15日(祝) 名 古 屋 清 泉 会 大 会 (来場歓迎)
- 29日(日) 青 島 会 大 会 (有料)

(2月)

- 4日(土) 幸 泉 会 大 会 (有料)
- 5日(日) 宝 生 会 定 式 能 (有料)
- 11日(土) 富 田 会 大 会 (来場歓迎)
- 12日(日) 世 定 式 能 (有料)
- 19日(日) 九 泉 会 大 会 (有料)
- 25日(土) 美 寿 会 大 会 (来場歓迎)
- 26日(日) 美 寿 会 大 会 (来場歓迎)

(3月)

- 5日(日) 大 狂 言 会 大 会 (来場歓迎)
- 11日(土) 能 楽 界 世 界 市 民 能 楽 会 (有料)
- 12日(日) 三 交 楽 会 大 会 (来場歓迎)
- 18日(土) 名 古 屋 能 楽 鑑 賞 会 (有料)
- 19日(日) 梅 嶺 会 大 会 (有料)

(演能変更の節はご了承下さい)

## 能 協 賛 能

能 楽 協 会 名 古 屋 支 部 主 催

### 12月4日 能 3 番 上 演

能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)主催による平成六年度の歳末助け合い運動「協賛能」はきたる十二月四日(日)熱田神宮能楽殿で、宝生流、観世流による能三番、和泉流狂言、金剛流舞臺子、金春流、喜多流、観世流狂言など協会支部能楽師の出演で開催される。

この助け合い運動協賛能は、毎年能楽協会名古屋支部の主催で行われ、今回は第二十六回目。昨年は愛好者の協力により、愛知県へ二十五万四千六百三十五円、名古屋市へ二十五万四千六百三十五円、合計五十万九千二百七十円が寄付された。

演能は、宝生流能「枕草子」(シテ玉井博祐)観世流能「龍田」(シテ前野郁子)観世流能「殺生石」(シテ古橋正邦)狂言「佐渡狐」(シテ松田高義)

## 金剛巖宗家 古希祝賀能

### 12月20日 京都 金剛能楽堂

金剛流第二十五世宗家・金剛巖師の古希を祝い十二月二十日(火)京都・金剛能楽堂で「金剛巖古希祝賀能」が催される。主催は金剛永護、職分、師範一同で、流儀をあげての祝賀能、午後二時始(一時開場)。

金剛巖師は、大正十三年十二月

生れ、伝統ある能楽の流儀を束ね、斯界の要職を歴任、芸術祭奨励賞、京都府文化功労賞受賞、平成三年紫綬褒章受賞。

祝賀能は、はじめに京都大学名誉教授菅泰男氏のあいさつ。演能は能「驚」、半能「石橋」狂言「木六駄」。番組は次のとおり。

半能「石橋」和合(シテ金剛永護、ツレ広田幸枝、ワキ高安勝久、笛・杉市和、小鼓・曾和正博、大鼓・中村喜彦、太鼓・前川光長、後見稲田道雄、谷口宗義、地謡豊嶋三三、今井清隆、豊嶋一喜、川崎淑ほか)

(入場料)指定席(簾席)一万七千元、自由席一万二千元、学生席(二階)五千円(当日売のみ)

お問合わせ・申し込みは金剛能楽堂(電話〇七五二二二二一三〇四九)、各出演能楽師宅。

## 紫綬褒章

### 片山九郎右衛門氏

#### シテ方観世流初の受章

片山氏は昭和五年、片山博通長男として京都に生まれる。昭和五十八年芸術祭優秀賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成元年芸術院賞受賞、現社団法人能楽協会理事。

## 観世雅雪七回忌 追善能

### 観世寿夫七回忌

#### 追善能

観世雅雪七回忌・観世寿夫七回忌追善能が十一月十三日、十四日、十五日、十七日の四日間にわたって東京で開催される。

十三日(火)舞臺子「芭蕉」鶴沢雅(能「頼政」)シテ浅井文義、ワキ藤常義)

十四日(水)舞臺子「春日龍神」(野村四郎)能「井筒」(シテ山本順之、ワキ殿田謙吉)

十五日(木)舞臺子「藤戸」(奥善助)能「梅枝」(シテ浅見真州、ワキ工藤和哉)

十七日(土)能「清経」恋之音(電話〇三三四〇一一二八五)

## 和泉元秀和泉流

### 十九世宗家在五十周年記念

## 和泉元彌和泉流

### 二十世宗家継承者成人披露

## 名古屋和泉会別会

十一月二十三日(水・祝)午後一時始

熱田神宮能楽殿

- |        |                 |
|--------|-----------------|
| 狂言 福の神 | 井上松次郎 井上礼之助ほか   |
| 狂言 武悪  | 和泉元彌 和泉元秀 佐藤友彦  |
| 狂言 樋の酒 | 和泉淳子 三宅藤九郎 井上祐一 |
| 狂言 小傘  | 和泉元秀 和泉元彌ほか     |
- 主催 和泉宗家後援会

## 秋の清謡会(十七)

十一月二十六日(土)午前十時始 熱田神宮能楽殿

### 葵天弱法師

- 連吟 蝉 丸
- 連吟 田 清水 慶藏 十倉 成己
- 村 鬼頭 和子 丹下 小波
- 山内 志げ 高見かね子
- 大久保早苗 加藤 茂代
- 山本 博子 長谷川龍子 吉村 春枝

### 藤戸

- 連吟 雨 月キリ
- 大半 正キリ 神谷 直市
- 山中人前 藤原 園男
- 三輪 藤枝 和子
- 磯部三枝子 高橋 千晴

### 花月

- 連吟 水越 弥生 鬼頭 英二
- 城 服部 玲子 鬼頭 英二
- 柳原富司忠 竹市 学

### 松林

- 連吟 紅 葉 狩 福嶋 照治
- 松 磯部三枝子 河村 総一郎
- 松 山口 耕造 柳原 富司忠
- 虫 林 和子 鬼頭 英二
- 五段 柳原富司忠 竹市 学

### 遊小町

- 連吟 柳 小林美和子 河村 総一郎
- 花羽 胡蝶 金原 孝典
- 衣キリ 高橋 千晴
- 山本 博子 藤田 六郎兵衛

### 山天

- 連吟 鼓 不破 峰子 河村 総一郎
- 立廻 岩田 加代 河井 啓次郎
- 坂 梅田 邦久 河村 総一郎
- 番外 熊 河井 啓次郎 藤田 六郎兵衛
- 舞臺子 伊藤 英二 鬼頭 喜太郎

### 附祝言

- 清 沢 政 会

### 御来場歓迎

- 補佐 梅田 邦久

電話〇五六四一五二一九〇九

青月雅日記 (156)

吹き寄せ

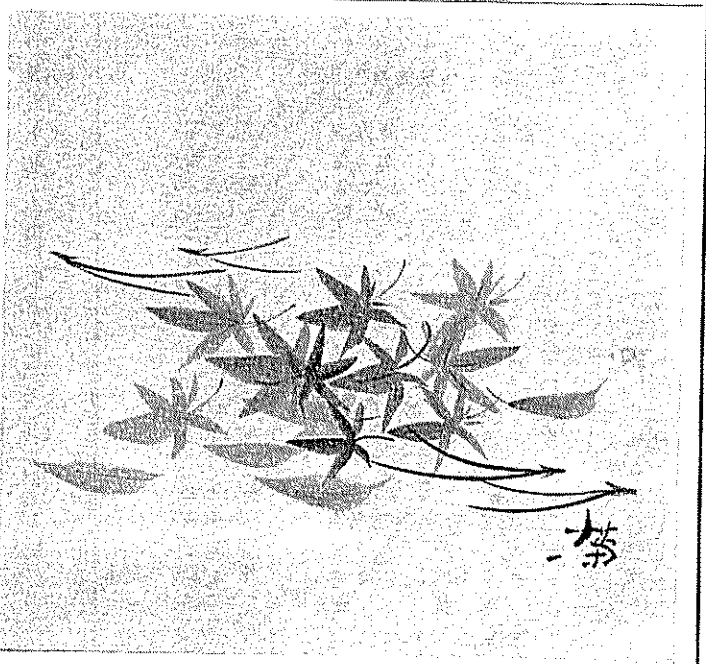
えと文 二井栄逸

落ち葉の季節に、銀杏、紅葉、柿、こなら等の落葉を拾い集め、汚れた水洗いして、あたたか風風に舞い落ちて一ヶ所に吹きたまったように、庭の一部に飾りつけを、茶人は吹き寄せとて楽しみます。

「東海能楽年鑑」(平成5) 発刊

中部能楽界の歩みきざむ

名古屋市立能楽堂が平成九年春の開館に向けて建築工にとりかかろうとしており、能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)では後進の育成指導事業の推進、新能楽堂完成開館に向けた記念出版事業として「近代名古屋の能楽を支えた人々(仮称)」の刊行を準備しているが、このほどこれに呼応する形で、別組織として「東海能楽研究会」が設立され「東海能楽年鑑」(平成5年版)が発行された。



茶

研究者が抽出してほしい」との気持を、年々強めていた。それだけに、東海地方にその動きが生まれたこと自体がまず嬉しい。しかも毎年の番組を整理して年鑑を作成することを継続して機関誌にするという。番組こそが能楽史研究の第一資料であると信じている身には、それもまた嬉しいことであった。

久田徹二独立二十周年記念 久田観正会秋季大会

Table listing performers and their roles for the autumn festival, including names like 熱田 神宮 能楽殿 and 小 盛キリ.

Table listing performers for the 6th performance (第六回 涛華能), including names like 神谷 貞子 and 高安 勝久.

Table listing performers for the autumn festival, including names like 船 弁慶 西沢 悦子 and 花 笹 操子.

Table listing performers for the autumn festival, including names like 善知鳥 宝生 閑 and 附祝言 主催 福井 啓次郎.

東海地方の能楽師と研究者が一体となって「東海能楽研究会」を創設し、表章氏は次のように序文を寄せている。

「地方能楽史はその地に在任する研究者が取り組むのでなければ本格的に進展は望めない。そんな研

入場券 指定席 一万円 自由席 七千円 取扱い チケットぴあ、プレイガイド(松坂屋・三越・中日・名鉄・芸文) 出演楽師宅 熱田神宮能楽殿 申込先 名古屋市中区大須三丁目二一四〇 福井啓次郎 TEL(〇五二)二四二一三三四六 FAX(〇五二)二四三二二二五七

『近代名古屋の能楽を支えた人々(仮称)』の編集作業と『平成五年版東海能楽年鑑』について

飯塚 恵理人

平成九年春、名古屋の能楽愛好者にとって待望久しい名古屋市立能楽堂が完成する。この完成記念出版として、能楽協会名古屋支部では、『近代名古屋の能楽を支えた人々(仮称)』を出版することとされた。編集委員は能楽協会名古屋支部から、寛飯一氏・佐藤友彦氏・学者として二宮百雄氏(社会学)・林和利氏(国文学・狂言)・三木邦弘氏(情報工学)・そして私(国文学・能)という顔ぶれである。

対象とする時代は明治以降現在までである。現代に近いだけに、新聞・雑誌の記事・個人の勲章・番組・日記など膨大な資料がある。しかしながらそれらのほとんどは未整理である。本を作成するためには、これらの資料整理から始めなければならない。また、未編集の資料もまだ相当あることが予想され、資料の収集に努めない限り、不十分な結果に終わることとなる。

紅梅記

夏から秋

猛暑が次第に爽やかな秋へ、そして夜寒の季節にうつる。芙蓉も咲いたが、菊の蕾はまだ固い十月下旬である。空は青い。

七月は毎年のきまつた演能(九皇会・朝日狂言会・野村四郎の会ほか)をみる。八月は新能に市民能も、ところが下旬に衣笠正宜の会が十回目をはななく行われ、宝生英照・西王母(ツレ同和英八かすふさ)か。正直、山姥を舞う。それに能組によると、観世能の派生の演能が花を添える。題目は「宝生流と私」。他流儀との交流は佳事、名古屋では珍しいこと。垂流(すいりゅう)の話である。そこへ家元英雄氏も茶名の豪華版。当日観能できず、見ずかすか。残念であった。観能の由。こうして九月を迎える。まだまだ暑い。それが今年に待望の演能がこの月に集まり、まことに不思議である。定例の観能会と宝生の会にはさまって、梅若橋氏の追

上でも、最初に手をつけなければならぬのは番組の収集・整理である。そして、これらをデータベース化する。また、研究の出発点となるだろう。また、毎年の番組のデータ補充等の作業は、三年後の能楽堂完成後も続けていかなければならない。

諸般の事情で、本完成後のデータ補充は協会の仕事とはなれ、編集委員会を母体とした「東海能楽研究会」が行うこととなった。データベースという言葉は、近年になってから使われるようになった言葉であり、一般の能楽愛好者にはなじみが薄い。愛好者の方々に資料提供をお願いする上でも、データベースとはどのようなものか説明する必要がある。また、我々自身も、それに習熟する必要がある。

このような理由から、データベースの試運転として、平成五年に行われた番組一覧・人物索引・演目索引を作成した。(今回は友人会に限定した。)また、現在我々

観世流謡曲本 ちくさ正文館 ちくさ駅前 電話番号1137

善と先代観世喜之氏の追善の会が先師をしのんで盛大に営まれた。観世氏追善には、孫の盛彦八のりひこV氏が清経・恋ノ音取を手向ける。父上盛彦氏は海士を、清経は清経で勇しきもやしきもあさり、父上以上に祖父の雲風を感じさせる。ただ小書はすなおな喜正氏が父上の望月にツレ(母)登場、よい味をみせた。その前途を祝した。また遊行柳(鶴義追善、岡田朗歌)はいつもより位高く、老女物と感し、感銘をうけた。岡田川(喜之追善、高橋一)はまこととに先代をしのぶにふさわしく、切りじつと立ちすくんだまま、印象深かった。狂言無布流(松・祐)佳。

歳末助け合い運動 協賛 能(第二十六回) 十二月四日(日)午前10時半始 熱田神宮能楽殿

壺泉会 二十周年記念公演 十二月十一日(日)午後一時開演 熱田神宮能楽殿

平成6年11月・12月放送 (11月)NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時) 27日(日)金剛流「井 萬」金 剛 巖



# 国の無形民俗文化財 「一色の翁舞」指定 古い形式伝え貴重

伊勢市一色町に伝わる「一色の翁舞」がこのほど国の記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財

の選択（国選無形民俗文化財）に指定された。（文化財保護審議会が十月二十六日文化庁大臣に答申）  
「一色の翁舞」は、和谷式翁のことで、一色能が和谷家から継承、一色町能楽保存会（土谷喜八郎会長）は、地元を中心に会員約八十人、和谷座の二十四代に当たる喜多流能楽師、和谷市師の指導で、伝統文化を継承している。  
記録の作成方法などについては保存会が中心になり検討するが、土屋会長は「大変名誉なことであり、優れた伝統を守り、能の振興につとめていきたい」と語っている。

今回の指定にあたって、地元の伊勢新聞（十月二十七日付）は次のように伝えている。  
一色能は、世阿弥（せあみ）が大成した能楽以前に栄えた猿楽の流れをひき、室町時代に伊勢地方で盛んだった伊勢三座のひとつ「和谷（わや）座」（現松阪市）の能が十六世紀に一色に移ったも

の。江戸時代に入って、能は中央の五流のひとつ「喜多流」に変わったが、このうち舞台を清める「式楽」として重要な「翁舞」は古い固有の様式を残している。  
具体的には、一色能の場合、通常「翁舞」を構成する「千歳（せんさい）」「翁（おきな）」「三番更（さんばんそう）」のうち、「千歳」が「神楽（しんがく）」に代わっているほか、舞は面を付けずに頭に烏甲（とりかぶと）をかぶり、黒狩衣（ひとえかりぎぬ）を身に付け、唯子（はやし）も黒（うたい）もない独特の形式を取っている。地元では、一色町能楽保存会（土谷喜八郎会長）が毎年一回三月に一色神社で演じている。

同審議会は、答申の理由について「一色能は終じて古い形式を伝えていると考えられ、能楽の大成に至る変遷の過程を知る上で重要」としている。  
「班女」 アイ野上ノ長・友彦に呼び出されしおしおと出るシテ花子・雅。ワキ吉田少将・元を追想して心晴れない屈託を、運びで入念にみせるが、アイならずとも焦れつた程の確信感もある。  
後シテは、前の赤地秋草文様唐織を脱掛け、面増の帯だけを残して髪は構ったが美しく出てきたとも見え、交した髪を後生大事、肌身離さずする心は、カケリに反映してさ迷う。クセ中に立ち揺るへ、へ夜は預れども、とつとつと連び速めるところに時を凝縮し、へ其方の空よと、では右より穿る下を眺め、川の流れに行く雲を見ながら繊細な表現を見せた。それにつけても寂しき憂やせめめでも形見の顔に触ること、と独居の淋しさを舞う中ノ舞の哀感も女流の持味。キリにワキへ立って行く所でも少し遅くかたね無難に、扇合わせも剛にあつさりこのフエテイシズム（異性の所持品に異常な愛着を示すこと）の能をトメた。地謡は博識以下八名の所謂婦人能。（1時間23分）

弘之の巧まない無邪気な表情に精彩があった。（21分）  
「鼓鼓」 シテ章、上ヶ端後、立って鼓キツと見込み近寄ると、腕に擬した扇で、へ力添へて、発止と打ち、へ聞けども聞けども、と退って耳を済ます態に面伏せ、へ音せぬものはかの鼓の、と鼓を指すと、打ち拉がれがっくり膝を折ってシオルと、鳴る期待の大きさを落胆は深く、心持充分にみせて悲憤、地謡（幸・富四夫・満次郎）が更に陰々滅々のムードを重ねる。  
後シテは白頭・大黒尉・前黄厚板・白地拾法被・紺地波文半切、ツレ女御・澄子の非道を糾弾し、恨み骨髄の鼓を打って詰り寄ると、肩をひんすす掴むかに引立つて、へ打ち給へ、と打ち振りかきす激しい敵意は、へを貴め骨を砕く、と数拍子踏みゆる物凄く、恋の淵にぞ入りける、とじわり右膝着いて沈むに、左袖で胸を抱いたトメの無気味も象徴的だった。ワキ雅介、アイ祐一、唯子は希世・富司忠・敏一・龍夫、後見を正宜・耕司、充実の一番。（1時間10分・9月18日・宝生会）  
「空腕」 空（そら）は偽り、いつわりの腕自慢は腹痛者の癖。夜道を使いしに遭らされたシテ太郎冠者・千作、「暮るるは〜」と正中くるくる小廻りし、心細げに「すつぷりと暮れた」と独白すれば、釣瓶落し秋の日の時間の経過に見る如くである。懸命に駆け来たアド主・千五郎の棒打ちに驚かれ、そりりと幽明確かめて起き上がった、「あら嬉しやまてまど立てた」の歡喜は、更に徒手体操もどきの投擲や捻りの型のパントマイムにチャップリンやマルソト以上のボディ・ランゲージ

## ◆新秋の舞台から◆（その二）

### 「先代観世喜之17回忌追善能」 「宝生会」 「第10回名古屋能楽鑑賞会」

竹尾 邦太郎

「菊慈童」 シテ美智子。曲に相応しい菊三徳世水紋紅白段唐織を重折に着、小柄な身体に菊葉団扇を持ちあぐねるかに蓬屋の床几につくねんと掛けたところは、俗を離れた仙童の無邪気が微笑ましく、造らない良さが、楽（がく）になると思慮に、つい自身調子を取って踏む拍子に、造らうとする悪さが出る。なお流是であらうがワキ勅使（元）は濁鳥帽子、唐物ならば唐冠の方が似合いそうだが。（41分）  
「隅田川」 シテ藤一、一所懸命の熱気が伝わる鼓は、吾子を思ふ哀しみを内に秘め、耐えて取り乱すまいと努める様を型少なな具象にみせて好演。就中クドキに、へこの下にこそ、と塚を見据えて居立ちこの土を掘り返して、と両手を差し出し、一目姿を見たいと

「望月」 シテ喜之。先代が殊に得意とした、と挨拶に言うが、芸風は先代が鉄の、ズンと腹に伝わる胆力なら、当代は鋼のしなやかに振返す知力で、「いざ討たう」、でその場を收拾するにもその持味が出る。  
先ずツレ母・喜正と子方・駒頼慎也君（面構えよく旨い）の道行の連吟が出色なら、主従対面にみられる子方とシテに通う連帯感の温もりや、首を装うツレの世話を何くれとなく焼く子方の健気など、後場への伏線の密着が劇的緊迫感を醸して上々。橋懸を退くツレが、一ノ松で杖を手放すとその音に隠れて足早やに舞に入る心の在りようや、羯鼓を舞上げた子方が腕を拵てるや袴を指し、シテが半帯に姿を見せる呼吸、もよかつた。  
後シテは小袖被き一ノ松、勾欄に左足を掛ける和被衣の下からワキ勝久を見込み、三鼓（啓次郎）鉦一・喜太郎の流しで舞台に入ると被衣に袖を通して獅子舞。舞上げると再び小袖を被いて廻り、敵討ちの身排えをするが、小袖着脱の手際が鮮やかで獅子舞の綺麗さの所以、見事だった。アイ又三郎、口元弛んで目が笑み出す廻りの、

の妙味を見せる。掃部後の、勢いづいた大口は千作の真骨頂。本年七月十八日、四世千作と十三世千五郎を襲名した親子の、器量一段と上った。後見は松本廣。（38分）  
「鬼界島」 シテ菊生、淡黄黄花帽子・中格子厚板・黒水衣。流人仲間の成経（明生）・康頼（邦生）の、掃部の神頼みにも超然と居る俊寛。偶々二人に呼び止められ、「早くも御覧じゆめたり」、と胸中舌打ちせんばかりの口吻を伏線に、水を酒と言いくるめ、へ心を汲み得し深谷の水、などと同時に及んで煙に巻き、自分のペーソスに持ち込んで東の間座興の酒宴となる廻り興味深々。シテは二人に酌をして立つと、左右の退く足（千年を経る）、揃える足（何時迄）、突っかけて出る足（春過ぎ夏明け）、の微妙な足遣いに時の推移を重ね、更に自身の心のありようも巧みに写して次第に懐旧的になり、頑迷な表情も柔らぐ。そして懐旧は、へ落つる木の葉の盆、に象徴される現実直視に目覚めさせ、へ水上は我なるものを、と身から出た錆を悔いて面伏せるところ、哀感沁みするものがあった。連帯感兆しかけたところだけに、赦免状に名の無い驚愕、腕に縮ろうとする膝行の悲憤、へ船影も人影も、と左みぎと差し出した手が虚空を泳ぎ、シオル気力も失せて、へ跡消え消えになりけり、と一足退き茫然自失、下を見たままトメたのも深刻さ一入だった。ワキ関、アイ千三郎、がっちりとして舞台を支える。地謡は昭世・鶴岡・能夫ら、好時、唯子は弘之（森田流）・啓次郎・総一郎、後見を辰三・鶴。（1時間3分・9月24日・第10回名古屋能楽鑑賞会）

## 出版紹介

「能と狂言」 林 和利著

名古屋女子大学短大助教授・林和利氏は、このほど「能と狂言」の生成と展開の諸相」の著作を上梓、世界思想社（京都市左京区）定価二千三百円。

## 岡崎城能

宇高通成後援会  
金剛流・宇高通成後援会では、十一月二十三日（祝・水）岡崎城能の丸能楽堂で「岡崎城能」を開催する。  
前回は第一部が連吟「小音」と仕舞、第二回は狂言「清水」（茂山千五郎、網谷正美）能「巴」（シテ宇高通成、ワキ高安勝久、笛・竹市学、小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村真之介、間・茂山千五郎、後見谷口宗義、宇高龍成、地謡松野共徳、広田幸徳、松野洋樹、小林忠三、竹市幸司、百々康治、吉田光寿）  
正午始、入場料当日券五千円、学生券二千円、申し込みは岡崎県学生会事務局（TEL0564・31・3794、内田方）

## 朗声会素謡会

岐阜市文化センターで朗声会（岡田朗詠師主宰）は、十一月二十日、岐阜市文化センターで秋の素謡会を開催、素謡一鶴小町」（シテ野々垣芳子）「卒都婆小町」（シテ篠田幸子）など八番、仕舞七番。

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！  
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！  
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きつとご満足いただける自信があります。  
テレビ放送番組企画制作  
テレビCM企画制作  
録音ビデオ  
ビデオプロダクション 西川企画  
名古屋営業所（千451）名古屋市中区名駅2-20-3輪の内荘 小椋方 電話（052）571-5816  
（千500）岐阜市北野町20-2 TEL（058）263-9869

株式会社 セントラルパーク  
本社 名古屋市東区泉1丁目23-36（NBN泉ビル）  
PHONE 052-961-6111  
F A X 052-953-2910

# 観世流・金剛流 宗家本発行 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話075(231)1990 振替京都1-113

# 能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
一 部 100円

## 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

[平成7年1月]

- 3日(火) 能楽協会名古屋支部開初め (番組①面)
- 7日(土) 名古屋学生能楽連盟 (来場歓迎) (番組①面)
- 8日(日) 狂言・鳳の会 (有料) (番組①面)
- 15日(祝) 名古屋清韻会大会 (来場歓迎) (番組③面)
- 29日(日) 青陽会定式能 (有料) (番組③面)

[2月]

- 4日(土) 幸福会定式能 (有料) (番組③面)
- 5日(日) 宝生会定式能 (有料) (来場歓迎)
- 11日(土) 宝生会定式能 (有料) (来場歓迎)
- 12日(日) 宝生会定式能 (有料) (来場歓迎)
- 19日(日) 九思会定式能 (有料) (来場歓迎)
- 25日(土) 九思会定式能 (有料) (来場歓迎)
- 26日(日) 九思会定式能 (有料) (来場歓迎)

[3月]

- 5日(日) 大蔵狂言会 (来場歓迎)
- 11日(土) 能と狂言の世界・市民能 (有料) (来場歓迎)
- 12日(日) 三交文会 (有料) (来場歓迎)
- 18日(土) 名古屋能楽連盟 (有料) (来場歓迎)
- 19日(日) 梅嶺 (有料) (来場歓迎)
- 21日(祭) 興隆会 (来場歓迎)
- 25日(土) 井上松次郎奉祝記念狂言会 (有料) (来場歓迎)
- 26日(日) 壺泉会大会 (来場歓迎)

[4月]

- 1日(土) 翠福会 (来場歓迎)
- 2日(日) 能楽殿創立40周年記念能 (有料) (来場歓迎)
- 8日(土) 名古屋清韻会 (有料) (来場歓迎)
- 9日(日) 観世会定式能 (有料) (来場歓迎)
- 16日(日) 邦福会 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了解下さい)

## 観世寿夫記念 (第16回) 法政大学能楽賞

### 山本東次郎氏 受賞 友枝昭世氏 受賞

山本東次郎氏

(受賞者)

法政大学(阿利英二総長)では昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに十五回の授賞が行われているが、本年も、各方面の識者により推薦された候補者について選考委員(川上忠雄「法政大学理事」・親世栄夫・馬場あき子・西哲生・友枝の五氏)により慎重に選考された結果に基づき、第十六回の受賞者として狂言大蔵流・山本東次郎氏、シテ方喜多流・友枝昭世氏の両氏を決定した。

(受賞者)

授賞式は「催花賞」の贈呈式と合わせ、明年一月十一日(水)午後六時から東京・赤坂プリンスホテルで挙行される。

友枝昭世氏

(受賞者)

「授賞理由」狂言大蔵流山本家の古格を継守しながらも、清新な眼で登場人物の役柄を把握し、真摯な演技で格調高い狂言を演じ続けている。

## 能楽協会 謡初め 名古屋支部 謡初め

舞囃子・仕舞と小舞

1月3日 一般に初公開

能楽協会名古屋支部(野村文三郎支部長)は、毎年一月三日、協会支部能楽師の参集により、熱田神宮能楽殿で謡初式を行い、新年を寿ぐ恒例の催しとなっているが、これまで支部能楽師のみで非公開

とされてきた謡初めを明春は一般公開(入場無料)として開放、来観者とともに新春を寿ぐことになった。

「授賞理由」狂言大蔵流山本家の古格を継守しながらも、清新な眼で登場人物の役柄を把握し、真摯な演技で格調高い狂言を演じ続けている。

## 演能案内

### 能楽協会名古屋支部 謡初会

平成七年一月三日(火)午前10時半始

熱田神宮能楽殿

四海波 連吟  
梅田邦久 高安勝久  
河村真之介 柳原富司忠  
鬼頭喜太郎 大野誠

草紙 洗  
衣斐正宜 河崎敏  
藤井啓次郎 藤田大郎兵衛

雪山 井上松次郎  
野村又三郎

大原 野村又三郎

狸 長田 杉江 元  
鬼頭英二 後藤嘉津幸

〔入場無料〕  
〔終了予定 十二時〕

## 第39回 学生能・狂言の会

一月七日(土)午前九時始  
熱田神宮能楽殿

能鶴 亀山美智子 福岡直子  
飯富雅子 河村大助  
杉江淳 柳原富司忠 竹市龍夫

能経 南山大学 高安勝久 小川陽子  
世古田浩紀 竹市学

能羽 間山あや 杉江元 河村真之介  
赤塚晴子 中野有希子 大野誠

能鶉 飯富雅子 河村真之介  
後藤嘉津幸 大野誠

舞囃子 愛知大学  
「竹生島」(金城学院大学)「敦盛」(名古屋大学)  
「安宅」(愛知県立大学)「胡蝶」(名古屋女子大学)  
「小替」(名古屋女子大学)「狸々」(愛知教育大学)  
「七騎落」(金城学院大学)「杖上」(愛知県立大学)  
「春日能神」(名古屋大学)

狂言 「口真似」(名古屋大学)「附子」(名古屋女子大学)  
ほか連吟、連調、仕舞  
主催 名古屋学生能楽連盟

## ザ・狂言鳳の会公演

一月八日(日)午後二時始  
熱田神宮能楽殿

二人袴 佐藤友彦、佐藤殿、井上礼之助、鷺見政行  
吹取 井上祐一、井上靖浩、大野弘之  
鬼瓦 井上松次郎、佐藤殿

棒 佐藤友彦、井上祐一、井上靖浩

〔有料〕  
全自由席 前売 三千円、当日券 三千五百円  
会員 千八百円、学生 二千円

チケット取扱い：チケットぴあ、市内各プレイガイド  
問い合わせ先：052-852-1111 名古屋女子大学  
林研究室、052-835-3780  
ギャラリーA.C.S.S、056613-8  
6430井上、052-682-175  
1 熱田神宮能楽殿





江戸から明治への  
名古屋能楽界

古春増五郎と「保能会」

冒頭から言いつづけて大要を  
結ぶが、名古屋の近代能楽史を考  
える上で基本となる資料は、「名  
古屋市史」、田鍋惣太郎の「名  
古屋市史」以外ほとんど未開刻で  
ある。能楽の研究は従来室町時代  
が考察の中心であって、江戸時代  
・明治以降に於ける研究は本  
に近年になってから始まったもの  
である。本稿もまだ充分な資料を  
用いて行っているものではない。  
このため、訂正を要する点も多  
いことと思う。是非御教示頂きたい。  
みっともないようだが、このよう  
な断り書きをしない限り、明治期  
の能楽研究など手がつけられない  
のが現状であるように思う。(未  
開分野でやりがいがあると思  
う。)

本題に入る。廃藩置縣後、名古屋  
屋で催しが行うことの出来た舞台  
は内藤泰三師の「眼」(名古屋から)  
によれば、早川舞台(早川幸八  
方)、山脇舞台(和泉流狂言家元  
方)、大野舞台(宝生流狂言方大  
野藤五郎方)の三箇所であった。  
言う。内藤師によれば、早川舞台・  
山脇舞台とも明治十一年・十二年  
後に催しの記録が途絶えている。  
大野舞台は井桁町にあった。十  
三年の大野藤七郎死去後、古春増  
五郎が上園町一丁目舞台を移し  
て催しを行った。この上園町一丁  
目舞台の名は「お能の番組」には  
明治十九年十月二十三日の番組を  
最後に消えている。

上園町一丁目舞台は、明治十二  
年から十九年あたりまで、名古屋  
で本格的な催しの出来る貴重な定  
舞台として存在したのである。  
『名古屋市史 風俗編』には、  
明治十四年六月五日・同十二日に  
上園町の古宅で行われた催し番  
組が記載されている。また、『お  
能の番組』には、明治十六年二月  
十一日から十七年三月十六日の約  
一年間の番組に古春の名前が見  
られる。明治十六年以後の催しに  
は「保能会」と会名がつけられて

これは明治初期の能楽界を考えると  
極めて興味深い資料であった。  
今月は、まず古春増五郎がどの  
程度の役者であったかを考察する  
材料として、彼が名古屋で舞った  
ことが判っている曲を、日付順に  
挙げてみようと思う。明治十四年  
のものには「お能の番組」によ  
るものは「名古屋市史」、十六・十七  
年のものは「お能の番組」によ  
る。場所は全て上園町一丁目舞台  
である。

「道成寺」(シテ 十四年六月  
五日)「石橋」(シテ 同十二年)  
「船弁慶前後之習」(シテ 同日)  
「歌占」(シテ 十六年二月十一  
日)「七騎落」(シテ 同三月十  
七日)「融納の舞」(シテ 同  
十八日)「杜若 沢辺の舞」(シ  
テ 同四月八日)「天鼓 パンシ  
テ」(シテ 同六月十日)「芦刈」  
(シテ 同七月八日)「雨田川」  
(シテ 同九月十六日)「正尊  
起請文」(ツレ 同日)「鳥帽子  
折」(シテ 同九月二十三日)  
「求塚」(シテ 同十月二日)  
「御法師」(シテ 左衛門十七年  
二月十日)「蠟丸」(シテ 左衛  
門 同三月九日)「舍利」(ツレ  
左衛門 同日)「俊寛」(シテ  
左衛門 同十六日)

このうち、十七年二月・三月の  
番組には「古春左衛門」とな  
っている。野々村氏の言われる通り、  
増五郎が左衛門を襲名していない  
とすれば、この左衛門は藤木であ  
ることになる。しかしながら、仮  
に十六年十月二十一日まで増五郎  
が生存していたとすれば、藤木は  
増五郎死去後長くとも百日余りで  
左衛門を襲名したことになる。(筆  
者は祖山女学助教授)

青陽会定式能(第139期)  
一月二十九日(日) 十時半始  
熱田 神宮 能楽殿  
舞臺小 鍛冶 加藤 保彦 馬場 信至  
高島 良一  
仕舞 籠太 鼓 今沢 美和  
近藤 幸江  
地謡 三村 恵子  
前野 郁子  
里野 翠子

能養 老 杉 正樹  
河村 大  
竹市 竜夫  
仕舞 高野 物狂道行 梅田 邦久  
地謡 高島 良一  
今沢 美和  
近藤 幸江  
清沢 中川 雅正  
中川 雅正  
加藤 保彦

草子洗小町 飯富 雅介  
河村 真之介  
藤井 啓次郎  
鹿取 希世  
仕舞 高野 物狂道行 梅田 邦久  
地謡 高島 良一  
今沢 美和  
近藤 幸江  
清沢 中川 雅正  
中川 雅正  
加藤 保彦

青陽会  
平成七年  
第三十九期予定  
第二回 五月十三日(土)  
トモ 須部 甫  
ツレ 梅田 邦久  
武田 邦弘  
前野 郁子  
今沢 美和  
第三回 八月六日(日)  
舞臺子 通小町 今村 嘉男  
盛 久 久田 敏二  
班 女 加賀 敏彦  
安達 原 近藤 幸江  
第四回 十月七日(土)  
今沢 美和  
梅田 邦久  
瀬戸 三津子  
松山 晃之  
松山 幸親

幸謡会  
二月四日(土) 午後一時半始  
熱田 神宮 能楽殿  
番組 高 砂 三村 恵子  
盛 久 今沢 美和  
采 女 前野 郁子  
大 江 上 瀬戸 三津子  
車 僧 加藤 春枝  
舞臺子 河村 真之介  
柳原 富司忠  
鹿取 希世

葛 近藤 幸江  
飯富 雅介  
河村 真之介  
柳原 富司忠  
鹿取 希世  
梅 弱法師 泉 嘉夫  
枝 ロンギ 泉 泰孝  
休憩 十五分  
仕舞 井上 松次郎  
井上 礼之助  
後見 佐藤 融

平成6年12月・平成7年1月放送  
〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)  
25日(日) 観世流「唐 船」大 観 文 蔵  
教育テレビ祝日能  
12月23日(午前10時~11時30分)  
喜多流能「楽 宅」(再放送)  
シテ 粟谷 菊生  
〔平成7年1月〕NHK・FM(午前8時~9時)  
8日(日)「菊 菫」~ 観世流 ~ 野村 四郎  
15日(日)「黒 塚」~ 金春流 ~ 高橋 汎  
22日(日)「藤 戸」~ 観世流 ~ 浦田 保利  
29日(日)「千 手」~ 宝生流 ~ 渡辺 三郎  
同・再放ラジオ第二放送(午後5時~6時)  
9日(月)「出 陣」~ 金春流 ~ 金春 信高  
16日(月)「東 北」~ 金春流 ~ 桜間 金太郎  
〔テレビ〕  
16日午前10時~11時 教育テレビ  
能「黒 塚」~ 金春流 ~ シテ 高橋 汎  
一平成6年NHK能楽鑑賞会から一

愛知県文化振興基金事業  
〔要員券〕 当日券 三千元  
附祝言 主催 青 陽 会  
後見 生駒 邦弘 地謡 三村 恵子  
武田 邦弘 地謡 須山 幸親  
須山 幸親 地謡 加藤 保彦  
加藤 保彦 地謡 加藤 保彦

附祝言 主催 幸 謡 会  
後見 水田 嘉夫 地謡 八神 幸充  
泉 嘉夫 地謡 今村 嘉男  
赤松 文蔵 地謡 赤松 文蔵  
赤松 文蔵 地謡 赤松 文蔵

錦秋の舞台から

「茂山家襲名披露公演」 「大槻白」 「主公演能」 「蠟燭能」 「観世会」 「宝生会」 「岡崎城能」

竹尾邦太郎

「福の神」 シテ三郎、「栗」の口吻は如何にも上方風味。劇的な幸四郎と実直な忠一郎の二人が、「ちと神前へ」と舞台から群に向かい「福は内へ」と豆を打つところはそのままと門水翁の狂言の趣。(21分)

ブラックシアター能

「楊貴妃」上演

1月18日・19日 県芸術劇場で

全体が黒で統一された劇場で演じる能ブラックシアター能が新巻一月十八日、十九日の二日間、愛知県芸術劇場小ホールで催される。

一月十八日 午後七時開演
一月十九日 午後二時開演
楊貴妃 観世鎮之丞
方士 宝生 閑
蓬萊の者 野村 信行
笛 藤田六郎兵衛
小鼓 大倉源次郎(18日)
福井啓次郎(19日)
大鼓 河村 大(18日)
白坂 信行(19日)
後見 梅田 邦久
清水 寛二

入場料・金席指定三千五百円。
チケット取扱、チケットぴあ
(052・320・9999)
ケットセン(052・290・0200)
愛知芸術文化センター
・プレイガイド(052・972・0430)
名演会館(052・931・1701)
お問い合わせ、愛知県文化振興事業団(052・971・5609)

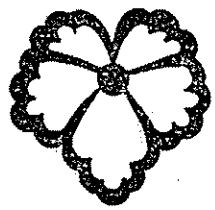
「楊貴妃」上演
山本 順之
観世 鎮之丞
浅井 文義
西村 高夫
岡田 隆史
小野里 修
柴田 稔
馬野 正基

「楊貴妃」上演
「蠟燭能」
「観世会」
「宝生会」
「岡崎城能」

ら。主役は勝一。(1時間34分)
「花子」 シテ千作。花子はいかに仏詣を口実の苦肉の策がやると叶い、貴重な一夜の暇を得るまでの過程のあれこれ、思い出すだにじわりと可笑しき込み上げてくるのも備に千作の器量。配する妻に千之丞。太郎冠者に忠三郎の黄金トリオがまた皆く絡み合い、三者の人物像がくっきりと表われるところ上乗である。喜び勇んで出た千作の翌朝の身繕いは、土鳥帽子は脱ぎ、黒地波瀾二葉文様紫袍袴を紺地色紙短冊散シ文様のものに替える。意気揚々の気分は右肩を脱ぎ、あまつさえ太刀を持つのが、座蒲団で待ちうける妻の怖さを予感させて恐ろしい。好い気なシテの、小歌謡ながらの道行の浮遊感、花子を思ふ惚気になり、あろうことか座蒲団の妻に抱きつく仕儀。この辺り、小歌に託した機微を千作熱演で見せ、此の期に及び「何処へ」と問われ、筑紫たぬきと書い投げようとする強かな根性も天晴れだった。(54分)

「唐相撲」 曾て「なんなんなんなんなん南京さん。南京さんの言葉は南京言葉。パイパイパイパイパイパイ」の童謡があった。その源流でもあろうか、シテ帝王・千五郎と通辞・其吾の唐語の遣り取りがひどく郷愁をそそり、童心に立ち戻らせる。この大曲の骨子は案外そこにあるかもしれないが、孤軍奮闘の日本力士・正邦には遣使小野妹子以後の国威発揚の影も尾も引けよう。とまれ登場人物無慮(9)四十余名、賑々しく一挙手一投足を率べて茂山家中の団結力を見せた。(51分・10月9日・茂山家襲名披露公演・大槻能楽堂)

「井筒」 シテ三郎。面は小面の可憐、その初々しい娘が夜更けて荒れ果てた古寺の庭に遊ぎ、定めなき世の夢心と水桶置いて合掌する意味あがりな様子、ワキ旅僧・勝久の好奇心をいたく刺戟し、中に至る執拗な問い掛けになる。業平の跡を懐古し、「へー散漫の、と世に目を遣り一足退く神をもった乾之助の佐野源左衛門常世は、さりとて引き締まった清爽な印象で、今後豊潤肥潤のシテは役造りに苦勞するだろう。地は朗・淳雄・孝道ら。早打・丸石やすしの立シヤベリと融レの臨場感も出色。(1時間33分・11月9日・大槻自主公演能)



料理 天 菜 軒
あつた
御料理
あつた
菜軒

本店 熱田区神戶町五〇三 電話(81) 86868
中店 熱田区神宮一 電話(82) 55988
分店 松坂屋本店10階 電話(83) 38255
支店 松坂屋本店地下1階 電話(84) 37661

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話01137